

被爆75周年記念誌

核兵器 終わりの 始まりへ！

私たちヒバクシャは、さらに前に進みます！

長崎県動員学徒犠牲者の会
長崎県被爆者手帳友の会

被爆75周年記念誌

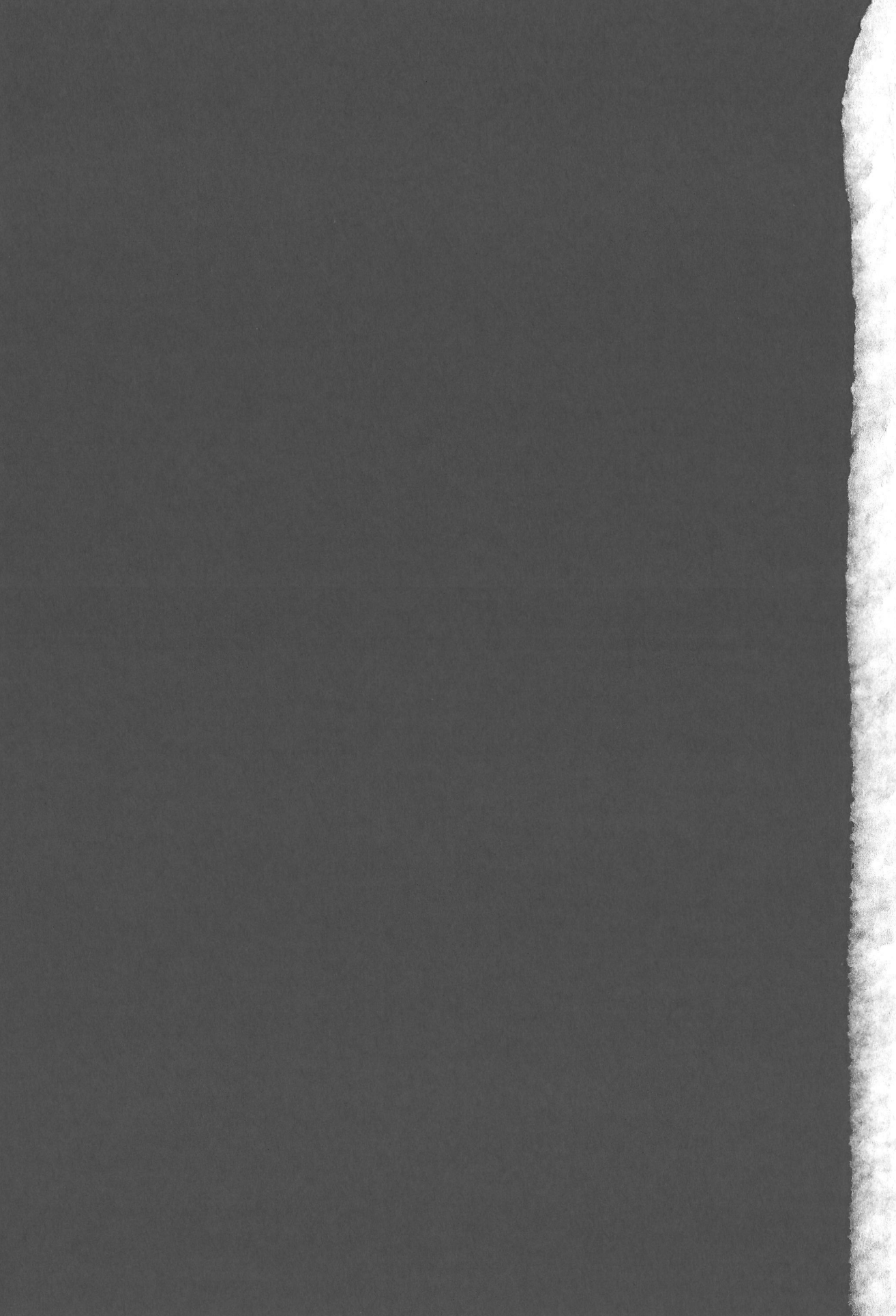
核兵器

終わりの

始まりへ！

「私たちヒバクシャは、さらに前に進みます」

長崎県動員学徒犠牲者の会
長崎県被爆者手帳友の会



長崎県被爆者手帳友の会
会員及び関係者の皆様へ

秋たけなわの候、時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。日頃から
当会の活動にご理解を賜り、誠に感謝申し上げます。

さて、被爆75周年記念誌をお届けします。ご高覧ください。

9月15日には事務所を移転し、「ヒバクシャ・コミュニティ・センター」と
して国際平和デーの9月21日に事務所開きを行いました。松山町交差点から
すぐ近くです。会議室・台所・和室も兼ね備えた広いスペースです。ぜひ一度
お立ち寄りください。皆様のご利用をお待ちしております。

尚、引越に伴う電話とFAXの移転工事が遅れ、10/12に開通します。番号は
変わりません。ご不便をおかけしましたことをお詫びいたします。



◆ヒバクシャ・コミュニティ・センター

〒852-8118

長崎市松山町 6-10 鈴木ビル 1F

長崎県被爆者手帳友の会

代表 朝長万左男

TEL : 095-849-1494 FAX : 095-847-1970

MAIL : TechoTomonokai@gmail.com

75925	(+76)	123	本	175105	(+20)	159
175157	(+23)	125	大	7849	(+11)	172
5180	(+5)	152	大	8070	(+6)	133
1833		153	高	8021	(+4)	133
1562	(+10)	155	井	478833	(+55)	133
4127	(+9)	157	エ	スタアランダカ		149
14			機	(移動クルーズ船)		
ルーズ船)					712	115
1865	1736	(+1767)				
17295	(+47)					

県内の被爆者団体の一つ「県被爆者手帳友の会」(朝長万左男会長)は10月1日、事務所を長崎市松山町内で移転し、若い世代と交流する拠点「ヒバクシャ・コミュニティ・センター」を開設した。現地で事務所開きがあった。

同会は1970年に設立し、現在の会員は約1300人。これまでの事務所はビル2階で、高齢の会員にとつて階段の上り下りが負担となっていた。

別のビル1階の新事務所はこれまでの約7倍の約80平方メートル。5団体の会のほか、小中学生を集めた被爆体験講話などの活用を検討する。奥には畳の和室もあり、将来的には県外の大学生らが泊まり込みで平和学習に取り組む地帯とするなど、若い世代と交流を促進する場所にしたがえ。

事務所開きには、被爆者団体などの関係者約40人が出席。看板を除幕して事務所移転とセンターの開所を祝った。朝長会長は「移転して便利な立地となった。若い世代を巻き込んだ活動をしたい」と話した。(後藤洋平)



被爆75周年記念誌

核兵器 終わりの 始まりへ！

私たちはヒバクシャは、さらに前に進みます





被爆者人生75年を生きぬく

長崎県被爆者手帳友の会 会長 朝 長 万左男

被爆者は昨年平均年齢83歳になった。それぞれの被爆当日の体験は、瀕死の重傷を負ったもの、かろうじて生き延びたものから、幸運にも無傷であったが放射線被曝で内臓がやられたが、なんとか生き延びることができたもの、重傷の火傷から生還したもの、爆心からの距離も1キロ未満の近距離であったものから12キロ（南北）までの遠距離におよぶものまで幅が広い。

近距離で被爆したものは防空壕や鉄筋コンクリートの建物などで幸運にも放射線はある程度遮蔽されて、生還できたものが多い。即死または3ヶ月以内に原爆症で死亡した人々は長崎では7万人を超えた。生き延びることができ、被爆者となったものは同じく7万人を超えた。その後肉親を探すために爆心を含む広い範囲を歩き回った人たちも当日の高い線量の残留放射線を浴びた人が多かった。

このように被爆者の11時2分の爆発による原爆体験の中身は極めて多彩であり、その後の人生において、ある程度の放射線量を被曝した人々は急性放射線症に罹患し、闘病を強いられ、死にも直面した。幸運にも生還できた人々は、しかしながらその後、別の新たな後遺症に罹ることを恐れながらの人生を生き続けることになった。

身体の問題を克服できた人々は戦後の食糧難と経済困難に直面した。あらゆる職業が被爆地では継続することが困難となって、かろうじて職を持ち続けた人々の日々の生活は例外なく、悲惨なものであった。しかし皆、家族の復活を信じ、長崎の復興を信じ、ひたすらに生き続けた。生活が安定するのには数年を要した。

家や土地の破壊で財産のほとんどをなくした人々の戦後はさらにきびしいものとなった。政府は敗戦の大きな打撃により、国民を、そして被爆者を救済する術を持たなかった。被爆者もまた市や県に頼ることを考える余裕もなかった。後遺症と生活苦は二重に被爆者を苛（さいな）み、これに精神的な苦難の日々がかさなって、原爆後の数年間、文字通り修羅場の連続であった。精神的にうつ病を患った人も少なくない。

日本の復興の兆しが出始めると被爆者は奮い立って、自らの家庭の再建と職を得て経済を立て直すことに専念した。結婚する被爆者も現れ、こどもが生まれると家庭の再興は被爆者に大きな喜びと希望を与えることになった。日常の平穏な生活を後障害が突然襲い、再び苦難の日々をもたらすことも少なくなかった。特に白血病になって、数ヶ月で亡くなる被爆者の運命は悲惨そのものであった。まだ原爆後10年間の早期には癌の発生は見られず、被爆者の不安の対象はもっぱら白血病に絞られていた。

1950年、朝鮮戦争が勃発した。佐世保に米軍基地を抱える長崎県は福岡県に次いで、米軍の負傷者の医療や破壊された船舶の修理や武器の補給などで、明らかに軍需景気が訪れた。回り回って長崎の経済も復興の兆しが現れ、それは被爆者の家庭にも恩恵をもたらし始めていた。

被爆者は体力と気力を回復し、こども達は学校に通い始め、勉強に励む日々が訪れ、平和を実感できるようになった。しかし、後障害のための医療費は十分ではなく、被爆者の家庭によっては、経済的困窮は一層深刻であった。特に白血病になった人々は、文字通り不治の病の経過をとって亡くなっていく

た。被爆者集団は皆、等しく白血病の発生を恐れる日々を過ごすこととなり、このような状況は10年以上にわたった。復興と後障害を恐れる日々がない交ぜとなったのが、昭和25年から30年の5年間でであった。

被爆者は次第に団結するようになった。政府に対して被爆者支援の増強を請願するようになり、次第に被爆者団体の数は増えていった。原爆被爆者の健康管理の改善が要求され、原爆病院が建設されたのは昭和33年のことであった。日本赤十字社が原爆病院の運営に当たった。被爆者手帳友の会が結成されたのは1967年であった。

被爆者の医療援護は日本の経済発展が本格化するまでは不十分であった。ようやくそれが向上するのは高度成長期に入った昭和40年の頃からと、時間がかかった。健康管理手当の支給が実現し、少額ながら手当が出されるようになり、被爆者は一息付ける状況が生まれた。この間、各被爆者団体の国への陳情は、それぞれの団体の会長によって精力的に行われた。特に「友の会」初代の会長、深堀勝一氏の精力的活動は、国会議員と厚生省に向けられ、その舌鋒の鋭さは彼らを恐れさせた。深堀さんの行動はひとえに被爆者の生活の質的向上を目指す純粋な気持ちから出ており、次第に政府も被爆者援護の中身を手厚くしていった。

現在の医療援護は治療費のほぼ全額が政府負担であり、健康管理手当もほぼ全被爆者へ支給されている。癌などに罹患した3・5キロ以内の被爆者には特別手当が、治療が続く期間支給される。特別手当の支給は時に却下されることもあり、裁判になるケースがまだあとを絶たないのは残念である。

昭和50年以降の高度成長により日本は世界でもまれに見る経済成長を遂げ、原爆被爆者への種々の手当の支給額は徐々に上がっていった。被爆者の生活は落ち着いてきた。

被爆者は、原爆被爆は戦争犠牲として、国によって補償（国家補償）されるべきものと考えたが、こ

れは他の都市の空襲などによる戦争犠牲者などとのバランス上、未だ国が認めるところとなっていない。原爆を投下した米国に対して謝罪と補償を求める声もあるが、無条件降伏という法的制約を受けて実行は不可能である。ここから核兵器を世界で二度と使用させない核廃絶運動に身を投じる若いヒバクシャが増えていった。長崎被災協の山口仙二さんがニューヨークの国連における臨時総会で「ノーモアヒバクシャ」の演説を行ったのが1982年であり、その後、営々と続けられてきたヒバクシャの核廃絶運動は、遂に2017年に核兵器禁止条約の成立を見るに至り、国際条約として、本年1月22日に発効した。この日を見ることなく亡くなられた多くの被爆者に対しては、彼らの核廃絶運動への多大な貢献に心から感謝を申し上げたい。

ヒバクシャにとって無念極まりないのは、世界で唯一の戦争被爆国である日本の政府が核禁条約署名を拒否したことである。今も政府はこの方針を維持している。これから、被爆者は新たな核廃絶運動を展開しなければならぬ。2019年7月に亡くなられた二代目の会長井原東洋一さんは海外への活動を熱心に展開されている途上でした。次世代のこども達に核のない世界を残そうと叫んでおられました。ご冥福をお祈り致します。

これからは「真の核なき世界」を実現するという戦いであります。日本政府と核兵器国への新たな挑戦でもあります。75年にわたって磨きをかけてきた核廃絶運動は新たなステージに入り、核なき世界の実現を目指して、いよいよ2021年1月にウイーンで開催される第1回核兵器禁止条約締約国会議に出席し、スタートを切ることになる。

被爆者の日常は今、平穏な日々となっている。その意味では平和は取り戻された。しかし75年間被爆者が耐えてきた日常については、振り返ると涙することなしに語ることができない。こども達に今だ被爆体験を語ることをしない被爆者もおられる。それほどの心の内面の苦痛を抱えての75年はいかばかり

の人生であったであろうか？想像するに涙せずにはおられない。慰めの言葉を誰がどうかければよいのでしょうか？政府による国家補償か、米国による謝罪か？大きな、大きな荷物を抱えて被爆者の人生はまだまだ続きます。放射線被曝の影響も続いていくと予想されています。これからわれわれ被爆者は消えていきます。核なき世界がこれからの地球の全人類にきつと訪れることを信じながら。苦難の人生に耐えたわれわれ一人一人の被爆者をわれわれ自身で褒めてあげましょう。そして核なき世界を人類に残していく活動に最後の力を振り絞ってまいりましょう。

会員の皆様全員の末永いご健勝を心よりお祈り致します。

目次

巻頭言 被爆者人生75年を生きぬく

長崎県被爆者手帳友の会 会長 朝長 万左男

証言集

私の2世裁判に提出した陳述書

被爆75周年に思う

被爆75年の思い

虫の知らせ

大東亜戦争 私の十代

戦争、原爆、戦後の生活

戦後75周年 非情の夢を思う

生かされて94歳

私の被爆者として振り返ったの記憶

私の中の原爆

現代いまを生きる

核廃絶を進めるには

被爆19歳 井原キヨミ19歳

野口伸一	………	2
深堀兼治	………	5
山下トシエ	………	8
嘉松愛子	………	10
緒方チエ子	………	12
上島恵美子	………	14
早崎猪之助	………	16
井手ミツエ	………	18
匿名希望	………	20
川下フミエ	………	22
浦辺弘子	………	23
三田村静子	………	26
井黒キヨミ	………	28

安日晋先生と友の会

ヒバクシャ地球一周 証言の航海

おりづるプロジェクト2018

核兵器の禁止から廃絶へ市民の力で進めよう

ピカドン（原爆）の話

おいたち

75周年日の思い出

8月9日とその前後の思い出

私の希い（願い）

私の原爆体験と戦後75年の人体影響の研究を振り返って

子どもたちに語り伝えたいこと

中村住代……………30

倉守照美……………32

外園二四郎……………38

鳥井國臣……………40

中村キクヨ……………42

福田貢……………46

本村チヨ子……………51

朝長万左男……………53

長濱キミ子……………70

広島・長崎への原爆投下が人間に与えた結末、

1945・2018…核兵器時代の終焉に向けた人類への教訓

朝長万左男……………79

被爆・戦後76年の歴史と友の会活動記録……………109

編集後記……………134

証
言
集



私の2世裁判に提出した陳述書

野口伸一

1 はじめに

私は、1947年7月18日生まれ、現在72歳です。

私の母は、20歳のときに長崎市戸町（爆心地から5km）で被爆しました。1号被爆者として、被爆者手帳を取得していました。

父は特攻隊でしたので、被爆者ではありません。病院に入っているときに終戦になり、地元の長崎へ帰ってきて、母と結婚したそうです。

私には、3人の弟と1人の妹がいます。4男1女の5人きょうだいの長男です。きょうだいも皆、被爆二世です。

2 母の被爆について

(1) 母が被爆したときの状況については、次のように聞いています。

母が20歳のとき、戸町の自宅に居て、空襲警報が止んだので洗濯物を干していたら、突然飛ばされ、気がついたら防空壕に入れられていたそうです。

母は被爆についてあまり語らない人でしたので、それ以上の詳しい状況は分かりません。

(2) 母は、大きな病気をすることなく、平成28年3月に90歳で亡くなりました。亡くなる前は、認知症になって

いました。

(3) 母は、子どもたちへの被爆の影響を心配していました。

特に、私の弟が26歳のときに急性白血病で亡くなったときには、ふさが込んで部屋から出てこず、「自分が殺したも同然だ」と言っていました。

3 私のことについて

(1) 私は、中学卒業後に九州電力に入社し、44年4カ月勤め、60歳で退職しました。その後69歳頃までは、知り合いのついで、しばらく障害者施

設の送迎などをしていました。現在、仕事はしていません。

(2) 私は、若い頃は病気をしたことはありませんでしたが、30代のころ、血液検査で血圧と血糖値の異常を指摘され、薬を飲むようになりました。現在も薬を飲んでいきます。

7〜8年ほど前には、脳梗塞を発症しました。ろれつが回らなくなったので病院へ行き、15日〜20日ほど点滴で治療をしました。

(3) 自分が被爆二世であることを意識し始めたのは、一番下の弟が急性白血病で26歳で亡くなったときからです。亡くなった弟は、病気をしたこともないくらい健康で、ばりばり仕事をしていました。そんな元気な弟が突然亡くなって以来、健康については不安だらけです。兄弟たちも皆、同じだと思います。

4 自分以外の被爆二世に関する経験

(1) 一番下の弟は、26歳のとき、急性白血病で亡くなりました。

弟は、耳から血が出る、鼻から血が出る、斑点が出る、と言っていました。弟は趣味で庭造りをしていたのですが、庭の作業をしながら、血を吐いたりもしていました。市民病院に行つて血液検査をしたところ、母が呼ばれました。母は「自分は行ききらん」と言ったので、代わりに私が病状の説明を聞きに行きました。弟が急性白血病であるということは、きょうだいたちには話をしましたが、母には最後まで言えませんでした。

(2) 2つ下の弟は、前立腺がんで抗がん剤治療中ですし、妹は難病で病院通いをしています。もう一人の弟も病院通いをしていました。

(3) 母方のいところも、一人、若くして

病気で亡くなりました。

(4) また、同じ被爆二世で戸町中学校の同級生の友人が、前立腺がんで亡くなりました。戸町中学校の同級生は400人いますが、ほとんどが二世です。もう50人ほど亡くなっています。その中でも、甲状腺がん、白血病などで亡くなった人は20数名います。そのほかにも、現在も病気で悩んでいる人、治療中の人がたくさんいます。

5 差別の経験

妻は、原爆の被害がなかった佐世保市早岐の出身者です。妻が私と結婚するとき、妻は、妻の母親から、「長崎の人やつたら被爆者が被爆二世の人が多かけん、やめとかんね」と言われたそうです。妻は、「大丈夫、病気ばもつとる人じゃなか」と言つたそうですが、私の弟が亡くなったとき、「やつぱり

「そうやかね。伸ちゃんは大丈夫かね？」
とまた言われたそうです。このことは
結婚してだいぶ経ってから聞きました。

6 子や孫の健康不安について

(1) 私には、3人の子もがいます。

娘2人と息子1人です。

(2) 長女は結婚して子どもを授かりま

したが、初産は死産でした。原因は
分かりません。

その次に生まれた子は、1000

グラムの未熟児でした。これについ

ても原因は分かりませんでした。

娘はもちろん、私自身もシヨック

でした。どうしてこう続くのか、

ひよっとしたら被爆三世というのが

関係あるのかもしれない、と疑いま

した。

長女は、子宮筋腫でしょっちゅう

病院にかかっているようで、心配で

す。

7 二世検診と治療費の負担につ

いて

(1) 私は、2ヶ月に一度、井上病院で

血液検査、尿検査、心電図の検査を

しています。二世検診は、これと同

じような検査がしませんので行っ

ていません。がん検診が入ったら受

けたいと思います。

(2) 井上病院では、毎回薬を2ヶ月分

もらうのですが、病院受診と薬代と

で月に1万円以上かかるので、医療

費が大変です。これ以上どこか悪く

なると、この先医療費を払っていけ

るのか、不安になります。

8 さといこ

私は、今は元気だけれど弟のように

突然病気になるのではないかと、

病気に對する大きな不安をいつも抱え

ています。弟が亡くなってから、自分

たち兄弟は特に体調不良に敏感になっ

ていると思います。ちょっと体調がお
かしかつたら、すぐ病院にかかるよう
になりました。

病気にならないか、という不安も大

きいですが、病気になったときに医療

費が払えるか、という不安もあります。

今の被爆者のように、医療費がかから

ずに病院を受診できるようにしたら、

とても安心です。

裁判所には、私たち二世がこのよう

な不安を抱えて生きていかねばならな

いことを理解してもらいたいです。



被爆75周年に思う

深堀兼治

核兵器禁止条約が昨年10月、50カ国・地域が批准し、2021年（令和3年）1月22日に発効となり、これは世界中のみんなと一緒に勝ち取った核兵器の廃絶へのスタートだと思えます。

もうひとつはノーベル平和賞の栄えある受賞を受けたICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）が日頃から核兵器禁止や平和運動など幅広く活動されたことが認められことではないでしょうか。

1945年（昭和20年）8月9日11時02分、一発の原子爆弾が長崎市の上空およそ500メートルで炸裂し、壊

滅的な被害を受け、およそ7万4千人の尊い命が奪われ、およそ7万5千人の方々が負傷したことは多くの方もご存じです。昨年は原爆が投下されてから75周年でした。

核なき世界への道は険しく遠く、今なおロシア、米国、中国など核弾頭が約13,410発保有していると言われていています。（へいわ169号）

核兵器禁止条約が禁止していることは「1.開発、2.実験、3.製造、4.備蓄、5.移譲、6.使用、7.使用するとの威嚇」の7つです。核兵器禁止・廃絶の願いを実現するためには、さら

に多くの国の批准が求められます。わが国は被爆国です。日本政府は今なお署名に背を向けていますが、いち早く認めるべきです。

被爆者の方々の思い

被爆者の皆様方が待ちに待っていた「核兵器禁止条約が1月22日に発効」されました。75年という長い歳月の経過の中で、先人の跡をたどるとその情熱と使命感そしてたゆまぬ努力によるものということがあらためて甦ってきます。

これまで原爆に関係する式典、会議

や催し物などの数多くの人が参加され、原爆禁止、核廃絶などついでのことを訴えてきました。その中で、特に、

1982年6月国連軍縮特別総会で、故山口仙二さんが「ノーモア・ヒバクシャ」と大きな力強い声で訴えられた被爆者初の講演が運動を続けていく原動力の一つになったと思います。しかしながら、精神的、肉体的、悲しいこと、苦しいこと等々、歯がゆいことが永遠に消えることはありません。一刻も早く、条約の批准を訴え、「核兵器廃絶と世界平和実現」で一致団結し、先輩諸氏とともに、世界へ訴え続けて行きましょう。

これまでの運動の成果として、ここ数年以下のことが特筆されます。

① 2017年（平成29年）9月20日
核兵器禁止条約の署名・批准が開
始された。

② 2020年（令和2年）10月24日

核兵器禁止条約が発効に必要な50カ国・地域に到達。

③ 2021年（令和3年）1月22日
核兵器禁止条約が発効。

また、朝長万左男会長が2020年8月9日政府代表に対し「21世紀の今後も永遠に隣国同士としての友好を保たなければならぬ北東アジア諸国とともに、核保有国と非核保有国の間の対立を克服し、米国の核の傘の必要性をなくし、北東アジア非核兵器地帯を実現すべくリーダーシップをとっていただくよう要望」しました。

母の思い

母は1917年（大正6年）4月28日生、25歳頃から石神町の三菱兵器工場に勤務していました。

1945年（昭和20年）8月9日11

時02分原爆投下、被爆当時は28歳だった。

た。被爆場所から投下場所から約1・8キロメートル離れた同石神町でした。

当日は勤務を終え、帰宅途中被爆にあったが、自宅までどうやって帰ったのか、誰に連れられて帰って来たのか、全く覚えてなくたいへんなできごとだったようです。少しずつ時間が立ち、わずかに記憶が戻り伯父、伯母そして兄弟たちに見守られていたようでした。身体は全身火傷で声も出ない状態で、何とも言えない火傷特有の臭いが強く、庭先にそのまま戸板に寝かせられていたと、あとから兄弟たちから聞きました。

その後は、聖フランシスコ病院へ担ぎ込まれ、頭、顔、腕、腹部、背中、足などの火傷がひどく、入院を繰り返して治療に専念したことを思い出す程度でした。

身体は数年が経過し、ケロイドが治っていくにつれ「頭、顔、腕、腹部、

足」など、一部を見せてくれるようになりまして。日にちがだいぶ経ったある日「原爆のことは、思い出したくない、誰にでも言いたくない、絶対忘れることができない」と言っていました。又、「母ちゃんは原爆病で、早く何時死ぬかわからん」とよく口にしていました。兄弟7人いる中、話してくれたのは私だけでした。

何故だろうかと思つて考えると、母の周りには「多くの死体があり、何とも言えない臭いがする人、焼けただけた人、身震いがする人、熱線、爆風などによる熱さ、苦しさ、痛さ」など想像したくない、原爆の恐ろしさをこのように思うといつまでも心も身体も癒すことのない深い傷と心労が精神的、肉体的に重なっていたのではないかと思ひます。

また、原爆手帳の交付が1957(昭和32年)9月2日、また障害者手帳(4

級)の交付1974年(昭和49年)3月1日、いずれも発症から申請交付の年月日が遅れていることに気付き、尋ねると当時恥ずかしくて言えなかったそうです。晩年は3年間の闘病生活による院内の看護師、スタッフの皆さんと一緒に明るく、楽しく喜怒哀楽を表に出さず、心から感謝し思い出をつくり98歳で天の道を選んだのだと思ひます。

私の思い

2019年(令和元年)8月27日朝長新会長が就任され、新長崎県被爆者手帳友の会が誕生し、役員一丸となつて①被爆者の相互扶助、親睦を図る。
②被爆者の社会的、経済的地位の確立を目指し努力する。など大きな事業目的に向かつて、まさにスタートしているところではあります。

原爆によるあの惨禍を二度と繰り返

かえさないためにも、非核三原則「作らず、持たず、持ち込ませず」を堅持することが必要です。

又、被爆者の軌跡を次世代へ繋ぐ責務を担う我々はバトンをしっかりと握りしめて、確実に次へと渡すとともに、絶対に忘れてはいけな思ひます。

何度も申し上げますように、核兵器禁止条約が50を超える批准国・地域で発効されました。これを契機として被爆地の長崎と広島が「心を一つにして」世界中から核兵器をなくすために、日本が批准国へ参加できるように運動を続けていきたいと思ひます。

これからも、被爆者とともに、被爆2世と毎月9日「平和の鐘」を響かせ全世界へ核廃絶を発信し、被爆二世運動の使命について考え、展望を切り開く一歩としてますます前進していかなければならな思ひます。



被爆75年の思い

山下 トシエ

原爆が落ちたときは、国民学校の3年生でした。私の家は、9人の大家族でした。祖母、両親、姉、兄、弟、それに従姉弟が5年生と3年生と疎開してきていましたので、一緒に学校に通っていました。その時は、夏休みで学校は休みでした。皆で11人で暮らして居りました。

8月9日は、従姉の誕生日だったそうで、伯母が会いに来ていました。祖母と伯母、従姉と私が弟を子守して家の中に居った時です。何ともいえない爆音と共に光と風が吹いて来て障子や建具が倒れかかってきました。一瞬の

出来事に私は弟を体の下にして伏せていました。普段練習していた通り耳を手で塞いで、気が付いて起き上がったみたら家中足のやり場もない位、藁と食器の割れたのが散らばって、家の中から空が見えていました。外で洗濯をして居った母が、怪我はなかったかと狂ったように叫んで来たのをよく覚えています。それから皆集まって裏山の防空壕へ逃げました。どれ位過ぎた頃だっただろうか、父と姉兄が居ないのに気がき心配していました。上の野原の所の田に草取りに行つて居つたのです。牛を連れて行つたのを野原の木に

繫いでおいて仕事をしていた時、光と爆風に驚き、木を折って逃げ出し、ようやく捕まえて帰つて来たのだと話してくれました。それから、もくもくと上がる火と煙を見ながら、大橋か住吉の方だろうと大人の人たちが語っていました。伯母は、兵器工場で働く旦那と息子を心配して、その日の内に帰つて行きました。残念ながら、伯父も従兄も跡形もなく、見つけることも出来なかつたそうです。その当時は、電話もなくラジオの在る所に集まってニュースを聞く位でしたので、人の便りを待つばかりでした。夕方近くに、

違う伯母と従姉が大橋の方で火傷を負い動けないで居ると便りがあり、父と親戚の人たちが夜になるのを待って連れに行きました。戸板に乗せて山越えしながら担いできたそうです。一夜明けてからだったと思います。二人とも大変な火傷で苦しがついていました。火傷の傷にウジ虫が食い込み、毎日母が手で取ってくれていたのが今でも目に浮かびます。薬もなくあれが良いこれが良いと聞いて来ては治療していました。そのうちに手足の傷も良くなり、2人共無事に家に帰りました。

私の地区は岩屋山の真後ろです。そのため、被爆者手帳の申請をする時には、岩屋山の陰で爆風も影響なかったと何回も言われました。丁度その時、新聞か雑誌の記事を見つけ調べたところ、岩屋山の高さより上空で炸裂したと書いたのを見つけ、それを証拠に市役所に行き交渉しました。爆発した高

さも岩屋山の高さももう忘れましたが、よく調べ直して下さり、手帳をいただきました。それ以来友の会のお世話になつて有り難く思つて居ります。

ようやく「核兵器禁止条約」が発効され喜びにたえません。若人の応援をしつつ、世界の平和を願うばかりです。役員の皆様のご苦勞を心より感謝して居ります。



虫の知らせ

嘉松愛子

昭和20年8月9日。いつものように工場へ向かったが、家を出て1分も歩かない時、警戒警報発令。一瞬迷ったが家に引き返してしまった。挺身隊として勤務した三菱電機、仲間同士、行員との触れ合い、楽しい毎日だった。巻線工場だったが次第に材料が不足し、空き地を耕して芋苗を植えたりした。空襲を受け防空壕に向かう途中、機銃掃射を受けた事があったが驚いただけでした。でも身近に敵の攻撃を受けようになり不安になったが、戦争に負けるとは夢にも思わなかった。家にいた昼近く爆音が聞こえてくる。今日

こそ敵機を見ようと玄関に降り立った瞬間、身のすぐむような真昼の閃光を浴び、しばらくは何もわからなかった。ふと我に返ると家の中は家具も建具も吹き飛ばされ足の踏み場もない。近くに爆弾が落ちたと思いい、畑に出ている母が気になり登って行ったが、道筋の家々はたいした変化はない。これは前日新聞で知った空中で爆発の広島と同じものだと思いつら母の無事を確かめた。母は背中がジリジリ焼けるようだったと言う。空襲を恐れた私たちは、家に戻らず一夜を畑ですごした。金比羅山に通じる向こうの道路は、浦上方

面から避難してくる人々が行列を作っている。この坂を下ってどこに行くのか、行く当てがあるのだろうか。夜になると死の世界のような静けさの中、県庁からその大通りに火災が延々と広がりがり、街の中に1本の火の帯を作っている。消す人はいない燃え放題の街、今日もない明日もない空っぽの頭で呆然と眺めている私だった。あの夜の光景は一生忘れられない。あの朝、隣の友人は「お腹が痛いので工場に行きたくない。」と言ったそうだが、お母さんは薬を持たせて出したという。それっきり帰ってこなかった。あれは虫

の知らせだったのに、と悔やむお母さん。私が工場を初めて休んだのも虫の知らせだったのだろうか。終戦後しばらくして、兄の戦死の公報が届いたときの母の悲しみは想像する事も出来ない。改めて、戦争の酷さを知った。2021年1月22日核兵器禁止条約が、批准した50カ国・地域で発効した。だが、日本は参加しようとしなない。日本も早く参加して、核の無い世界を実現して欲しい。被爆者としてもっとも願うところである。友の会の月例行事、平和の鐘打鐘、この集いこそ私達友の会会員の心の拠り所。長崎の平和の鐘よ世界中に鳴り響け。



大東亜戦争 私の十代

緒方 チエ子

昭和16年12月8日は、私が小学4年生の2学期終りの頃でした。其の頃は、授業の合間に防空頭巾をかぶり、校内で避難訓練や2列に並んでバケツリレーなどもしていました。昭和18年3月に新興善国民学校6年生で卒業できました。南山手12番地に住んで居たので浪の平の学校高等科1年に入りました。其の頃は教科書もなく謄写版で写したのを何枚か綴じたのをもらって勉強していました。昭和20年になり毎日空襲がひどくなり、学校へも行けなくなりしました。ある日5人での登校途中、警報も鳴らないうちに、機銃掃射にあ

い、石畳の上を銃の玉がはねかえっていました。私たちの通学の道の途中に軍の司令部がありました。堀の下の溝の中にとび込んだりして学校まで行けず家に帰ったりの毎日でした。20年8月8日いつものように夕食を早めに済ませて警報がならない内に防空壕に早く行くようにと母に言われ、私はいつものように生後1年半の妹を背負い7才と4才の弟を連れて大浦天主堂の石段を登り、神学校の前を通って隣組の防空壕があるところまで行きました。私達が居る所は、父が畳半畳分程の板を敷きゴザを敷いてくれて、そこで寝

ていました。8月9日の朝になり、「みんな外に出てよかよ。」と大人の声を聞き防空壕の中から出て行きました。壕の前は広い運動場で大きな木が1本あり、みんな木の下に座り込みました。11時頃になり弟が弁当を取りに行くと言ってはなれました。私はふと空を見ると飛行機が見え落下傘が2つ見えたので、いつもと違うと思い、妹を背おい防空壕に走り込みました。4才の弟は近所のおばあさんが連れて行ってくれました。私達の後に何人が走り込んだ時にもものすごい音がしました。後ろの方で「広島に新型爆弾が落ちたそう

だ今の音は今の音は其の音かもしれない！”という声が聞こえました。夕方5時頃まで恐ろしくて身動きできませんでしたでしたが、「外に出てみようか。」という声でしたので、私達も恐る恐る外に出てみると、高台から見える市内は一面火の海で、高い建物のレンガが次々と焼け落ちてるのが見えました。恐ろしくてふるえが止まりませんが、昼食を取りに行くと言った弟が心配になり、家に行ってみました。弟は神学校の人達が取り囲んでくれて助けられたそう、窓ガラスが割れ怪我をした人が居て顔から血を流していて恐ろしかったと言っていました。私の家族は、上の兄が19年1月に南方で24才で戦死。次の兄は入隊し22才。20才の姉は九州製菓で事務員で窓ガラスが割れて大変だったけど机の下に入ったそうで怪我はなかったそうです。2番目の姉は18才で、8月13日に看護学校に入校が決

まっていたので家に居て机の下に入ったそうで無事でした。16才の3番目の姉は国鉄の長与の管理部に勤めていて、翌日線路をつたって帰って来たそうで、途中真つ黒に焼けた人達が「水をくれ！」と叫んでいたそうで、何もできなかったと泣いていました。父は新町の雨森病院に勤めていましたが無事でした。母はみんなの食事を作っていた何か倒れてきたと頭にコブができていました。8月10日夕方までに家族みんな無事だった事がわかりました。8月13日に2番目の姉は久留米に向かい出発しました。8月15日、玉音放送を聞き、戦争が終わったと聞きました。近所の人達も大さわぎしていました。米兵が上陸してくる女の子は連れていかれるという恐ろしいうわさがとびまわっていたそうで、両親の話し合いの上、父の郷里が嬉野なので引越そうときまり、8月17日の夜中に、自分

達の大事な物だけ手に持てるだけ持って海岸通りを行き出島、大波止、長崎駅を目指して歩きました。駅に近づくとつれ、真つ黒に焼けた馬や異様な匂いと空には大量のカラスの鳴き声が続いている恐ろしい光景にふるえながら、何時間過ぎたのか大勢の人の居る中で家族みんな貨物列車に乗せてもらいました。

私の長崎での10代は今も薄れゆく想いに、核兵器のない世界を切に願っています。戦後75年も生かされました。両親に感謝。世間の人々に感謝です。有難うございました。



戦争、原爆、戦後の生活

上 島 恵美子

1930年（昭和5年）6月3日誕生。昭和12年長崎県日見村国民学校入学。

長崎市内で危険区域と見なす地域は疎開が始まりました。そのため、田舎の私たちの学校には仲間が増えました。国の為、子どもも遊ばず働けとの指令が出され、小学校6年生の時、出征された家庭にお手伝いに行きました。私たち男女6人は、枇杷畑の草刈りでした。鎌を持って畑の草を取ればミミズが足下に動き、それを見た男子生徒は恐れている女子生徒にミミズをつかんで投げるいたずらをして、男子生徒は

喜び、女子生徒は泣いて逃げ回り、えらい騒ぎでした。忘れられぬ昔の思い出の一つです。

昭和18年、女学校に入学。網場から市内までバス通学で、車は木炭車でした。日見峠の坂道で車はエンストし、運転手と客全部が降りて車を押す事になります。しかし、坂道でなかなか前に進まず、やっと平道まで押し漸く動きませんが、時は過ぎ学校では遅刻証明をもらい登校する日々が続いています。度重なる遅刻にみんなに申し訳なく思い、仕方なく片道2里余りを歩いて往復し、通学することになりました。

日見トンネルは、工場が疎開して機械が入り、油は流れ雨の滴で足元はドロドロベラベラ。履く靴もなく泥水の中を歩いて通いました。

昭和20年6月、女学校3年生。報国隊として動員されました。長崎貯金支局ではソロバンとの闘いでした。仲間の下宿生は、1週間親元に帰省し、三菱製鋼所へ動員されました。

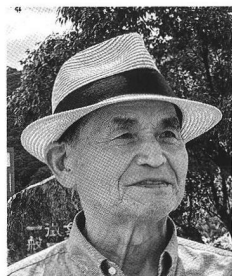
原爆の日、昭和20年8月9日、警報が解除されれば出勤する事になっていましたので、家にも帰れず途中道路で避難していました。音がするので空を見ればキラキラ光って動いていました。

瞬間強い閃光と風に吹かれ、その後の記憶はありません。気付いた時は、道路端の家の屋根の瓦礫の下でした。怖くなり一生懸命這い出すと、外は荒れ放題で、人影もなく、仲間を呼んでも返事も無く、じっと周囲を見ていました。すると、側の瓦礫が動ききました。仲間でした。2人共たいした怪我もなく、手を貸すと立ち上がる事ができませんでした。即、防空壕を探しますと近くに人の姿がありました。私たちを見るなり、「お前たちがウロウロするけん此処が狙われた。来るなー！」と怒鳴られ、追い返されました。無情な怖い大人でした。女子2人、周囲に気遣いながら日見トンネルに向かって歩きました。出口で空を見ると黒い雲と白い物がふわふわと普賢神社の方に流れていました。陰を伝って家にたどり着いた一日でした。

学校は原爆に焼かれ、犠牲者も多数

あり、開校は遅くなりましたが、市内の学校の午後をお借りして、授業が開始されました。遠くからの学生は、帰りが暗くなり、親様が提灯の灯りを下げて迎えに来ておりました。

終戦後、真つ向に受けた閃光と爆風の影響を心配し、生活全てが不自由にもめげずに家族全部で助け合いの生活でした。90才を越えた今、家族に感謝の毎日です。



戦後75周年 非情の夢を思う

早崎 猪之助

風吹くままに、花は咲き 雲流るる
ままだに幾星霜人が去った75年前の悪夢
の今は、あの多くの人が泣く間もなく
母は逝き、我々の生き姿は花びらとな
り年毎の春もまた 夏草茂る8月も
草花として我を見つめる感がする。
日本人全てが信じさせられた神州
不滅の心。「我は軍神なり。」という一
部の人に騙された結果、原爆投下の敗
戦までに350万の日本兵は戦場で、
多くの国民は内地で、人生の並木路も
一瞬に消え去る非情の谷間に置かれた。
10年近く続いた戦争が終わってみれ
ば、生き残った人たちは食糧難にあえ

ぎました。そして思い叶わぬ夢ばかり
を追いかける日々。右も左も行き詰ま
り、人生は谷間の中に押し込まれ、子
どもたちに喜びを与えることも出来な
い時代。人生の光のない時代だった。
戦争中は、国民には戦争に負けると、
日本はアメリカの州の一つになると言
われていたが、軍の指導者は、自分た
ちの国を守るのに必死だったのだらう。
軍のお偉方は、本当の人殺しの神に
なっていた。
戦後直ぐは、被災者は死に物狂いで
生きてきた。今は、原爆の面影はない
けれど、7万4千人の方が、骨と化し

たことを誰が信用するだろうか。
道の尾駅から県庁まで焼野が原。そ
して至る所に人骨が見当たる。大半の
人は、人災と知らずに、遠い世界に去っ
て行った。戦争が終わったことは、戦
争に負けたこと。不名誉なことではな
く、1日1日今度は平和が来ると期待
しながら、不自由な暮らしの中にも、
心の自由が訪れた。でも、自分は被災
者とは公に言いたくない。被爆者は、
半病人として社会の隅に置かれた者
だった。女性は尚更のことである。
被爆者が他界した人も多い中、自分
はいつしか89才になったが、今、世界

は平和な時代とは言えない。いつ変化するともわからない。戦後75年経って、いろいろと変わっていく。核は大きくなり、テロの動きに安心できない。世界ではいつの時代でも小競り合いの戦いがあるが、日本は島国。平和な国として、今や世界のオアシスになるようです。

原爆被爆都市として、多くの外国人が珍しがってナガサキを訪れます。私は、「緑豊かな長崎の街が一瞬にして灰の街と化し、7万4千人が白骨化した土地です。今、平和都市として平和の発生の地として、長崎の受けた惨状を知ってもらい、長崎は何を物語っているかを読み取ってほしい。」と思っています。残り少ない人生を、戦のない世界をと願うものです。

時は去る中に此度、朝長大先生を迎える事の出来た事 何よりの喜びでし

た。さぞ、前会長も喜んで居られる事

と思います。私も長崎の鐘の下に水を汲み15年間経ちまして、原爆その日の有様そのままに語るも聞くも供養と想う一時です。平和の尊さも。口では表せない。長崎の人の想いを世界の人に告げ知ってもらいたいです。先人は誰かの為にどこかの民の為に戦をするも350万の兵をなくすとは、非常の世界に消えゆく人を何と救う事も出来ず、天皇のお声にて戦が終わり、私らは敗戦より終戦を喜びました。それは、死の心配がなくなり、何より喜びでした。そして、一被爆者として友の会に入会して居る事を何やら誇りに感ずるものです。此度、雲の上に居られるような大先生をお迎えできた事を、前会長もとても喜んで居られる事と思います。私も体は弱ることも、まだ善良なる智慧はなくなっていますが、悪智慧が残っています。私は今年で90才ですが、中

村副会長様を見習いたいです。

暮れには、長崎みなとメディアカルセンターで全身の検査あるも、どこも悪い所なく安心しました。でもやはり耳これも90才となれば仕方有りません。今は新型コロナウイルスの終息を心より願うものです。世界の人の心は、さまざまなかにも戦のない世界を若人に安心できる社会を造つてと常日頃コロナより幾万の人が生きる道を与う人、又、職をなくす人、希望を与う人 此の夜明けが待ち遠しいです。今年も又平和な年の為に、小さな力を合わせ、鐘の音を全部世界の国へ伝えたいです。

今年も又会長様を中心に友の会の発展を願う一時です。



生かされて94歳

井手 ミツエ

18歳の私は三重村の地区単位の動員で挺身隊に入り、三菱兵器住吉トンネル工場（穴工場）で働くため、住吉神社脇の女子挺身隊宿舎から工場に通っていました。穴工場では四〇〇旋盤で小さな螺子（飛行機の部品と教えられていました）を昼夜2交代で作っていました。原爆投下の時は夜勤明けで空襲警報が警戒警報に変わったため、安心して宿舎の2階で寝ていて、気付いた時は屋根の下敷きになっていてなんとか這い出しました。周りは一面の火で覆われていたので、途中何度も崖を転がりながら死に物狂いで穴工場まで逃

げましたが、中には工場勤務者、怪我人、避難者で溢れ、入ることが出来ませんでした。「山（現赤迫保育園辺り）に逃げろ！」と言われ、見るに堪えない地獄絵さながらの中をどうにか山まで登っていきましたが、山も人で溢れ、座る場所もなく、やっと何とか大怪我で苦しんでいる青年の横に座ることが出来ました。その青年は血だらけで「本校に帰りたい。」と繰り返し言っていたので大学生だと思いました。その後、自分で歩ける人は汽車が出るので諫早に向かうようにとの指示があり立ち上がろうとしたら、青年が「私も連れて

行って」と血だらけの手を差し出しました。私自身も頭から出血し、背中は火傷し、手にはガラスの破片が突き刺さっていたためどうすることもできませんでした。今でも、「私も連れて行って」と言った青年の顔が時々夢に出きます。

下山して汽車を待っていた時に、本当に本当に奇跡的に滑石峠を越えて娘を探しに来た父と会うことが出来ました。父親に支えられながら横道の肥塚酒店までたどり着き、酒店でリヤカーを借りる事が出来ました。避難する人、搜索に駆けつける人が行き交う滑石峠

を越え、ようやく心配して集まった人々が待つ多良地区にたどり着きました。服はボロボロで脱ぐことも出来ずにハサミで切ってもらい、裸足であることをその時初めて気付きました。

被爆により背中への火傷と頭を十数針縫う怪我でしたが、病院も満室で入院できず、隣村の佐藤病院まで父と地区の人が4人ずつ交代で毎日山の中の畦道を籠を担いで通院させてくれました。

本当に地区の人たちには感謝しかありません。また、休むことなく毎日担いでいたため、肩の皮が擦りむけた父にも感謝しています。数日の間に病院では、亡くなる人が相次ぎ、自分自身も死に対する恐怖と怪我の痛さで不安の日々を過ごしました。

茂里町の三菱製鋼所で働いていた姉の消息が分からず心配でしたが、二週間後に茂木の防空壕にいることが分かり、親戚の人がリヤカーで迎えに行き

ました。帰って来た姉は吐血し、髪も抜けてしまいました。母は体に良いとドクダミや柿の葉を採りに行き、二年間もの間毎日煎じて飲ませてくれました。

地区の皆さんと両親のお陰で何とか生かされ、終戦後、良き伴侶（夫も8月22日入市被爆）に巡り会い結婚。一男二女に恵まれました。

二年前に、県外に住んでいる長女が新聞に短歌を投稿。

・原爆忌「みんなの分も生きんば」

と今年も誓う母九十二

・こわごわと触った母のケロイドが

私の平和祈念のスタート

の二首が掲載されました。

私の事を詠んでくれた娘の事を嬉しく思い、今も壁に貼っています。娘は、原爆に対する思いの温度差が、長崎と県外では大き過ぎると嘆いています。

私も94歳となり体調もすぐれず、介

護を受けながらの生活をするうち、戦争や原爆の悲惨な出来事を二度と起こさないためにも、あまり教えてこなかった子、顎、ひ孫たちにしつかりと語り継がなければと思うようになり、自分の体験を文章にしました。

いつの世も戦争なき核なき平和な世界になりますよう祈っています。

私の被爆者として振り返ったの記憶

匿名希望

はじめに

90才を迎え記憶が大分薄れておりませんが、特に印象的な事を思い出し乍ら最後の寄稿文といたします。

八・九脳裏に刻まれしあの一瞬

真昼の太陽 光失う

その日私たちは、小栗小学校の教室で「軍人勅諭」について講義を受けていました。瞬間ピカツ!!とすごい光太陽はどんよりとなって、その後から灰のような物が降ってきたと思っっています。

それから後は皆自宅へ帰ったと思

ます。ピカツと光ったのは、新型爆弾が長崎に投下されて、負傷者が沢山出ていることが判りました。私も女学校に行くように連絡があり、学校まで一人で行った記憶があります。学校へ行きましたが、私たち女学生は夜になるから……と帰宅して、翌日行くことになったと思います。(父も負傷者を看護所になった学校へ運ぶために、リヤカーを引いて諫早駅へ向かったことを覚えています。)

女学校の講堂で負傷者の介助

私たちが学校の講堂に着いた時には、

婦人会の方たちはお世話をしておられて、「負傷者に水は飲ませないで!!」と強く注意を受けました。私たちはガーゼに水を含ませて、唇を湿してあげました。可哀想で悲しく思い乍ら手伝ったと思っています。(今思えば、飲みたいだけの水を飲ませてあげた方がよかったかも知れない。)

真夏のこと、傷口にウジ虫が湧いている。それを箸で取ったりしたので、それはとても怖かったと思います。その時代だったから出来たのだろう。と強かったのだと思います。

挺身隊の美しいお姉さん

挺身隊とは、女学校を卒業した人たちの奉仕隊で軍需工場等に動員されていた人たちとします。大村や長崎にも他県からみえていたようです。その負傷者の中に、お顔が美しい方があって、体には布が掛けてあったので重傷だったのでしょう。姉妹がない私は、こんなお姉さんがあつたらなあ。と思いつつも悲痛な印象が残っております。講堂の厚い生地のカーテンは敷物に、白いカーテンは包帯になっていました。

遺体搬送の後の講堂の作業

遺体が搬送された後の作業は特に印象深く忘れることが出来ません。床にこびりついた血液や膿をタワシに水を含ませてこすります。それを雑巾でしぼり取る作業を繰り返し行いました。当時は靴も手袋もありません。(全くありませんでした。) 全て素手素足で

一生懸命作業に務めました。「戦争に勝つまでは!!」「お国のために!!」と云う教育を受けている私たちは、授業などありません。動員学徒として、軍需工場で飛行機の部品を作る作業もしました。どんな事でも、一生懸命に務めて来ました。

命を繋いだもの

当時、お米などありません。食糧の配給制で、少しのさつま芋や大豆油の絞りかす(家畜の飼料の様なもの。)が工夫して代用食を作って食べさせてくれたと思います。このような物でも食べる事が出来たから、命が繋がっているのでしょうか。

感謝の念を忘れず精一杯命を大切にしていきたいと思えます。

最後に戦争絶対反対

戦争とは、罪もない人の命を容赦な

く殺害するものです。戦争を許す事は絶対に来ません。世界の平和を祈るばかりです。



私の中の原爆

川下 フミエ

当時、学校から動員学徒として浪の平の工場に通っていましたが、その日はお休みで、油屋町の家にいました。家がゆらゆらと揺れてピカツとしたので、防空頭巾を被って八坂神社の防空壕へ駆け上りました。

中は、身動きができないほどいっぱいでした。夜になってやっと庭に出てみたら、県庁から新興善辺りが火の海になって燃えていたので、びっくりして防空壕の中で一夜を過ごしました。翌朝、寺町通りを通って国道に出たら、焼けただれた人などが並んで歩いておられたので、その中に入り込み一

緒に歩きました。日見トンネルを通り、矢上からみんなと別れて実家（飯盛町川下）に帰りました。

実家に帰ったら、母が待っていました。母が「戸障子が倒れた。」と言うのを聞いて、こんな離れたところまで爆風の影響があったのかと驚きました。「父は？」と尋ねたら、大学看護学校に行っている姉を探しに行ったのとこのとでした。

夕方、父が姉を連れて帰ってきたので安心しました。姉は、永井博士と金比羅山に救助に行っていたと話してくれました。

その後、学校から慰霊祭をするから来るようにと連絡があったので行ってみると、一面焼け野原に変わっていたのでびっくりしました。

今、思い返しても、原子爆弾の恐ろしさを忘れることができません。



いま 現代を生ききる

浦辺 弘子

長崎に原爆が投下されてから75周年を迎えた今、時代も昭和、平成、令和へと移り変わり、今世界はコロナ、コロナとコロナとコロナ禍の中、国民は毎日不安な気持ちで、恐怖に怯えた生活を送っています。

今から75年前を振り返ってみます時、昭和20年8月9日11時2分、長崎に1発の原子爆弾が投下されたことを忘れることは出来ません。一瞬にして多くの人命が失われました。私は当時8才。爆心地から4・6キロメートルのところにある大浦出雲町で被爆しました。幸い家の中に居たので、外傷もなく無

事でした。物心ついた頃からアメリカ軍の爆撃機に怯える日々を過ごしました。

8月15日終戦を迎えました。家族全員無事でホッとしましたが、1年余りが経った頃、母親が脳溢血で倒れてしまったのです。それからの私は、母親の面倒と弟妹の面倒を見ることになり、大変な日々を過ごすようになりました。そのような中、母親が出産する日を迎えました。生まれたのは女の子でした。しかし生まれて4日目に洗面器いっぱい血を吐いて亡くなりました。被爆の影響が放射線に汚染された食べ物

の影響が詳しくはわかりませんが、小さな命が突然失われたことに大変ショックを受けました。我が家の苦しみは依然重くのしかかってきました。産後の母は、塞ぎ込む日々が続く、精神的に不安定だったので、私はつきっきりで看病しました。当然学校に行くことも出来ません。近所で楽しそうに遊んでいる友だちを目にすると、なんで私だけこんな辛い目にあわなければいけないのかとの思いが込み上げてきました。トイレに駆け込んで、泣いてばかりいました。当時の生活は大変貧しくて、今の時代では、想像できないかも知れ

ませんが、家にお風呂もなく、そんな時代でした。まもなくしてから、近所のお風呂屋さんが営業を始めました。

それから時々銭湯に行けるようになりました。しかし浴槽はいつも芋洗い状態でした。脱衣所の箆も順番待ちするほどでした。弟と妹を連れて行き、体をきれいに洗ってあげるのですが、いつも決まって持ち帰る物があります。

それはシラミです。衛生的には決して良い環境ではありませんでした。戦争になれば食べ物が無くなり、着る物もありません。戦争が終わっても人間らしい生活は出来ません。そんな生活を続けていると人の心も荒んでしまいます。戦争は絶対悪です。私が25才の時、寝たきりの母が54才で亡くなりました。それから5年後、昭和42年5月縁あって私は今の主人と結婚しました。嫁ぎ先はびわ農家で、お舅さんやお姑さん、そして体の弱い主人の妹と暮らすよう

になりました。今まで苦勞することに慣れていましたが、農作業の日々に一苦勞しました。が、仕事熱心で真面目な主人のおかげで、今までこれたように思い感謝しています。

現在長崎県被爆者手帳友の会にお世話になっていますが、主人も協力してくれています。毎月「9の日」長崎の鐘の打鐘に参加するようになったきっかけは、平成20年2月、友の会の研修旅行（九十九ホテル）へ友人に誘われて参加した折、井黒キヨミさんと東海ムツ子さんとの出会いでした。毎月9日を楽しみに、私が住んでいる大崎から平和公園までバスと電車に乗り換えに参加をしています。

思いがけなく、井原会長と事務局の増山さんよりお話があり、平成27年3月、核廃絶を願う行動する高校生一人署名活動実行委員会の代表メンバー等と一緒に韓国を訪問するという機会

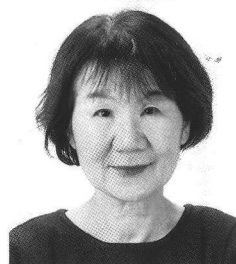
を戴き、喜びと感謝の気持ちを中心に抱き、友の会より野口伸一さん、深堀兼治さんと共に参加を致しました。この事が私にとって人生で大きな転機となりました。今まで家族にさえ被爆体験を話したことがなかった私が、初めて韓国で被爆体験を発表しました。この事が核廃絶への誓いを尚一層深めることになりました。あの時韓国での経験がなければ、自らの被爆体験を人に死ぬまで語ることはなかったでしょう。

この事が私が所属する創価学会平和委員会に伝わり、同年8月2日、広島で開かれた広島学講座「被爆者が今できること」と題して講演を致しました。平成28年1月9日、長崎の鐘打鐘の後、友の会の事務所で皆さんと食事中に、突然に心筋梗塞で倒れ、救急車で運ばれ入院、手術をして命拾いを致しました。昨年（2020年）10月30日、長崎県被爆二世の会の「戦争と原爆の

遺構巡り」で私が被爆した場所、大浦出雲町へ出向きました。当時のことを思い出しながら案内を致しました。参加者は12、3名でした。又、11月には、創価学会青年平和委員会からも「被爆証言集 大切な青年と未来をつなぐナガサキの声」という本が出版され、私の体験も載せていただきました。

このようにして、今現在があるのは、創価学会と長崎県被爆者手帳友の会という素晴らしい会にご縁をいただいたことにほかありません。

一日一日を大切に生きて、世界の平和と二世、三世の発展を念願し、私の命ある限り頑張って参ります。



核廃絶を進めるには

三田村 静子

4年前国連で採択された核兵器禁止条約は、10月24日ホンジュラスの批准により、2021年1月22日に発効予定です。

ほぼ1か月前の9月26日国連が定める「核兵器の全面的廃絶のための国際デー」に国連広報センターとNGO連絡会共催でシンポジウムが開催、「愛と平和と一生懸命」のキャッチフレーズでサッカーを通して平和活動をしている、高田明さんの基調講演をYouTubeで見ました。その中で、現在の核廃絶の動向を見ると、平和を共有するのではなく、自国第一主義がはび

こり、これで本当に核兵器が無くなるのか疑問を持っている。そこで被爆75年間の今、平和を愛する被爆者の語り部活動や、22年前に始まった高校生平和大使の活動は、そのまま大事にしなから、何が本当のネックなのか考える時期にあるのではないかと述べられました。

彼は歴史に学ぶ重要性に触れ、コロナ禍の自粛生活の中で、歴史の映画を200本見て、「結果的に人種差別の問題が根底にあり独裁者が戦争を起こす。権力者が一番恐れているのは民の声である。やはり国民の声は何もかも

変えていく力がある。だから私達は政治に常に興味を持ち政治を変えていかねばならない。それが映画を見て一番痛感した事です。」と語り、サッカークラブの再建に使った「残す、捨てる、加える」の手法を、平和を愛する全員が議論しやり方を「残す、変える、加える」の視点から運動をする必要がある。また、多くの女性の政治参加が進めば核廃絶も進むのではとの見解も述べられた。

テレビショッピングで伝える力を磨いてきた高田さん自身も平和を伝える活動をしているが、そこで重要なのは、

平和を伝えたではなく、どれだけの人に
伝わったのか、ここを強くお伝えした
いと述べています。

思います。

私たちも、特に若い学生に平和を發
信する際には、相手に伝わったのか、
を常に考える必要があります。でもこ
れは大変難しい今後の課題です。

核兵器禁止条約は発効しても核兵器
を一発も削減しません。条約の目的は
「核兵器は絶対悪」の認識を広める事
で、市民意識を変えて世論により国策
を変えさせるのが本質だと思います。こ
れは発効後、最初の百日間、また千日
間でも成し遂げられないかもしれませ
ん。私たちは発効に満足するのではな
く条約加盟国の数を増やし、日本政府
にも国民の声により核兵器抑止力への
依存を低下させる必要があります、そのた
めにはこの条約に賛同する政治家を出
来るだけ多く国会に送り込む等の手法
を真剣に考えねばならないのでは、と



被爆19歳 井原キヨミ19歳

井 黒 キヨミ

昭和20年8月9日 午前11時2分。

爆心地より3・2キロメートル離れた桜馬場町の中村医院に見習い看護婦として働いていました。爆弾が投下された時は、家の中にいて強い閃光や熱い爆風は受けましたが無事でした。先生は第五救護所(伊良林国民学校)の所長になっていました。私と3人の仲間と一緒に被爆者の看護に携わりました。全身焼けただれた黒焦げになり男女の区別もつかない重傷者が裸同然の姿で救護所に運び込まれましたが、消毒液も少なくクレゾールのようなものを大きな器で薄め、ガーゼに浸し傷に当て

てやるのが精一杯でした。治療のための薬もなく瀕死の人は「水を下さい。水を下さい。」と叫びながらうめき苦しみ、次々に命を落とされました。2・

3日のうちにはウジ虫が傷口に湧き、手のほどこしようないまま亡くなり、校庭では次々に運ばれてくる死体を焼く黒煙と悪臭が長崎の空を覆っていました。あの惨状と苦痛の叫び声は、今も私の眼の奥耳の底から離れません。無傷だった人も一ヶ月後に亡くなりました。母も一週間後銭座町の市場辺りまで知人を探しに行きました。その後少しの切り傷が破傷風状になり

全身動けなくなり、大病院(新興善国民学校)調外科に入院。ペニシリン注射で命をとりとめるも40日間余り動けないままの退院でした。1年位過ぎ、

やっと動けるようになったのにブラブラ病になり夕方になると高熱が出て、髪が抜けるようになり赤い斑点まで出て、亡くなりました。私も口内炎や心臓病など患いました。遠縁の人と結婚し流産したら、「原爆のせいだ!先々がおそろしか!」と何回も姑に繰り返し言われ離婚しました。

原子爆弾の名は、戦後2年過ぎて知りました。新型爆弾とかその毒ガスで

やられたとか言っていました。放射能もビキニ事件後知りました。

刻は過ぎ、2人の弟もガンで亡くなりました。放射線の影響かどうかかわかりませんが…

原子爆弾は地球上のすべてのものを死滅に追いやり、人間の遺伝子までも影響を及ぼす悪魔の兵器です。昭和22年憲法が発令されて75年平和な年を過ぎることが出来ました。

憲法9条。多くの犠牲者の魂のこもった憲法は絶対変えないでいただきたい。

「戦争も核兵器もない平和な地球を子や孫へ」が私たちの叫びです。令和2年1月22日核兵器禁止条約が発効されました。被爆者をはじめ世界中の人々の願いが少しでも認められたのですが、日本はまだ参加していません。これからも核兵器廃絶に向けて、生きている限り叫び続けます。



安日晋先生と友の会

中村 住代

「七十も八十までも生きようとは思わない。ただあと十年生きてあなた達被爆者の脈をとりたかった」日本赤十字社長崎原爆病院（以下病院とする）正面玄関右手の安日先生記念碑に刻まれている言葉です。この記念碑は、当時日赤長崎原爆病院の副院長で被爆者の安日晋先生（以下先生とする）が病魔に侵されながらも被爆者医療に心血を注がれ51歳という若さで、昭和51年3月19日ご逝去された先生の死を悼み、末永く先生のご遺徳を偲びご功績を後世に伝えるために昭和51年8月7日に長崎県被爆者手帳友の会（以下友の会

とする）が建立したものです。片淵町にあった旧病院玄関前庭で原爆忌を前にしたあの暑い夏の日、初代会長深堀勝一氏自ら除幕し式が執り行われました。私は1969年（昭和44年）4月に当時医療ソーシャルワーカーとして就職し除幕式に参列、あの日のことは昨日のことのように鮮明に記憶しています。私の仕事は、原爆医療法と被爆者特別措置法の2法に基づく医療や援護相談が中心でした。そのために友の会をはじめ被爆者団体とのつながりは密でした。友の会は、私が就職した前年に会が設立され、しかも特別措置法

も前年に制定されるという状況の中で、活発な相談事業に力を入れていました。役員の方々が、会員の原爆手帳申請や認定申請、健康管理手当などの相談のためにしばしば私が勤務していた医療社会事業部を訪れていました。竹馬さん、岳本さん、磯田さんなど親身になってお世話をしている姿が今でも蘇ってきます。先生は、このような友の会活動の良き理解者でした。私も先生から色々教えをいただきました。今でも忘れられないのは、先生に連れられて原爆認定審査会を傍聴する機会をいただいたことです。当時も今も、認定申請

は、長崎市を通じて厚生労働省に進達するその仕組みは変わりませんが、当時は広島市、長崎市の地元で事前審査ということで小委員会が設置されていました。長崎市に問い合わせたところ、その記録はないとのことでしたが、広島市には、被爆50年史にその記述があるとのことなので私の記憶に間違いはないと思います。傍聴した後、審査の内容に少し不満を漏らしたのだと思います。先生から「そんなに怒るな」とたしなめられ、先生の優しさがじわつと伝わってきました。今にして思うのは、私が就職した年は、被爆後まだ24年しか経っていないかったのに、当時の私の認識では、原子爆弾の投下は、戦争の悲劇的な結末で人類が決して忘れてはならない歴史上の過去のこととしての理解しかありませんでしたが、被爆者にとっては過去のことではなく今に続く耐え難い経験であったということ

とでした。このような未熟さを抱えながら、戦後生まれで、しかも長崎出身ではない私が、先生や深堀会長や友の会の会員の皆さまとの交流を通して被爆の実相に触れ、反戦、反核、平和希求の思いを学生時代にも増して形成できことは私にとって一生の宝物となりました。改めて被爆者医療に生涯をささげた安日先生と平和運動や被爆者援護対策の充実などで、尽力された深堀会長に感謝し、そのご功績が永遠に記憶されることを願ってやみません。

参考資料

「創立二十周年記念誌」日本赤十字社長崎原爆病院発行



ヒバクシヤ地球一周

証言の航海 おりづるプロジェクト2018
核兵器の禁止から廃絶へ市民の力で進めよう

倉守照美

2017年7月、国連で核兵器禁止条約が採択され、これに貢献した核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）が、2017年12月にノーベル平和賞を受賞しました。市民の力によって核兵器は違法な兵器となったのです。ノーベル平和賞受賞後初、平和賞メダル、賞状とともに、2018年5月8日〜8月21日迄106日間「ヒバクシヤ地球一周 証言の航海」が横浜港を出港しました。今回の航海では、被爆者2名（広島1名、長崎1名）、被爆二世1名が、世界24ヶ国（25寄港地）を訪れ、証言活動を通して、核廃絶を

訴えました。世界各地で行う被爆証言会にて現地の人と共有しました。私たちは、日本政府から「非核特使」の委嘱状を受けて、広島と長崎の惨禍を世代と国境を越えて継承すること。唯一の戦争被爆国である日本から「核兵器のない世界」に向け署名、批准の要請を強化。共に市民社会の熱意と関心に向け、政府と市民社会の効果的な連携を益々求めていく取組みもしました。しかしそれでも、核保有国はこの現実を受け入れようとしていません。自らは保有していなくても核兵器への依存を続けている国々も少なくありません

ん。残念ながら日本もその一つです。朝鮮半島では核の脅しと戦争の危険が現実のものとなっている中、核兵器禁止条約に効力を持たせ、核兵器廃絶を実現するためには、核兵器が人間や社会に何をもたらすのかを伝え、広めていくことが不可欠です。それは被爆国日本の世界的な責任ではないでしょうか。過ちを繰り返してはいけません。第98回ピースボート「地球一周の旅」の乗客約750名の皆様と共に、パシフィック・オーシャンドリーム号（35、265トン）に乗って、世界を回ってきました。参加者3名の被爆

者は、日本政府の「非核特使」として、
として核兵器惨禍の実相を、広く国際
社会に伝達すると共に、世界各地の世
代に継承していく役割と任務でした。

5月12日台湾の基隆（キールン）で人
権と白色テロ時代の歴史を物語る博物
館では、恐怖時代の証言を聞くことが
出来ました。日本の植民地だった台湾。
5月18日、シンガポールでは、日本の
占領下時代の政治が解る国立博物館歴
史ギャラリーを見学。戦争記念公園、
日本占領時期死難人民記念碑（血債の
塔）戦争記念公園にある高さ68メー
ルの慰霊塔（虐殺の犠牲者の霊を鎮め
るため1963年に建てられた）を見
学し、黙祷しました。

第二次世界大戦中は、日本軍はシン
ガポールを占領し「昭南島」と改称。
外務省を訪問し、核兵器禁止条約への
署名、批准を要請。5月23日コロンボ
（スリランカ）外務省訪問。国連大使

との面会。非核国でかつては英国植民
地時代がありました。2018年5月。

スリランカのシリセーナ大統領が広島
原爆資料館、平和記念公園を訪れ、被
爆後に味あわなければならなかった痛
み、悲しみ、苦しみは筆舌に尽くしが
たいと記帳。「こうした被害が二度と
起こらぬ努力をしたい。」と述べられ
ました。アジアで原爆証言をしていく
にあたっては、日本がかつて行った植
民地支配や侵略戦争でアジア太平洋の
人々を苦しめてきた過ちに対する反省
の意識を持って証言交流を試みました。
6月5日。サントリーニ島（ギリシャ）
ここギリシャは哲学、科学そして民主
主義発祥の地です。ここには、原発は
ありません。北大西洋条約機構（N A
T O 米国との軍事同盟）の加盟国で
あり、核兵器禁止条約には政府は反対
しています。核戦争防止国際医師会議
（I P P N W）ギリシャ支部のもと、

大統領、国会議員、政府高官と面会。

市役所、小学校訪問。証言と交流。大
統領は、「科学や技術の発展は、人間
に貢献してこそ意義がある。傲慢にな
らず文化を発展させること。それこそ
がギリシャ精神。」と話し、「核兵器政
策を決めるにあたり、被爆者の経験こ
そが一番重要。」と話して温かく迎え
られました。世界の多くの若者や子ど
もたちは、ヒロシマ、ナガサキの名は
聞いたことがあったとしても、そこで
実際に何が起きたのか、被爆者がどの
ように苦しんできたかを知りません。
島の学校訪問。証言。映像・パネル・
原爆写真などを使い、体験を伝え、「核
とは何か」を人間の視点から語りまし
た。「過去の戦争に学び、未来の平和
をつくる」という理念を持ち、交流さ
せていただきました。本船からテン
ダーボート船んで20分、サントリーニ
島の港に着きました。青いエーゲ海に

囲まれたこの島は、紀元前16世紀に大爆発した火山島で、人口約1万4千人の小さな街で、カルデラ地形の崖にはプールドーム教会や白塗りの四角い家々が並び、青と白のコントラストが絶景でした。そして子どもたちの瞳もつぶらで美しかったです。6月6日、7日ピレウス（ギリシャ）。ピレウスはギリシャの首都アテネから約10キロほど南に位置し、地下鉄で約20分というアクセスの良いところで、ギリシャ第4の都市です。アテネはオリンピック発祥の地で、1896年、2004年にオリンピックを開催しました。オリンピックで灯された聖火は、古代オリンピックの聖地であるオリンピアで採火され、その後多くの聖火ランナーによってオリンピック開催地へ運ばれていきます。古代ギリシャ人にとって火は聖なるものでした。戦いに明け暮れる日々から逃れ、ゼウス神が見守る

中、正々堂々と競技に励んだ古代ギリシャ人たち。敵味方なく誰もが平等で互いに讃え合い、平和を象徴するその精神は、近代オリンピックに受け継がれています。昭和62年8月1日に市民の手によって灯火台が建設され設置された長崎の「誓いの火」は、「長崎を最後の被爆地に」にするという誓いが込められ、大切に灯し続けられています。「ナガサキ誓いの火」は核兵器が廃絶されるまで、灯し続けられます。ギリシャは、NATOの加盟国であるが故に、核兵器禁止条約に反対の立場です。ただ、民主主義発祥の地で、市民運動や労働運動が伝統的に強いこの国では、市民第一で考えた際の核兵器は、戦争の苦しみと悲惨さを乗り越え、続く世代を核兵器の呪縛から解放するという大きな目標を果たすために、一心に恐ろしい兵器がもたらした影響と闘っていると伺いました。

8月7日23番目の寄港地シアトル（アメリカ）です。ピースボートのシアトル寄港は初めてです。従って証言活動も初めてです。シアトル港より車で3時間の所にあるプルトニウムの精製が行われたハンフォード・サイト（核施設郡）を訪れ、原子炉の見学とスタッフの証言会が行われました。この核施設がもたらした放射線汚染に苦しむ「風下住民（ダウンウインダーズ）」を代表して農家のトム・ベイリーさんにお話を伺いました。シアトルが位置するワシントン州をはじめアメリカの西海岸は、アメリカの核兵器の開発の歴史において重要な役割を果たしてきました。ワシントン州のハンフォード・サイトでは、第二次世界大戦中から冷戦期にかけて、プルトニウムが精製されてきました。ここで作られたプルトニウムは、1945年8月9日午前11時2分に長崎に落とされた

原子爆弾（ファットマン）に使われま
した。

私は当時1才で被爆しましたが、記
憶はありません。人口約20万人が戦時
中とは言え、日常生活を送っていた
人々の頭上に突如襲いかかってしま
した。原爆のキノコ雲の下では、どのよ
うな状況だったのかを説明します。

原爆の被害は、大きく3つあります。
1つ目は「熱線」です。原子爆弾の火
球は1秒後には最大となり半径240
メートルまで膨張し、爆発直後の爆心
地の地表の温度は、3000度から
4000度に達しました。爆心地付近
は6000度。鉄が溶ける温度が約
1500度だそうです。

2つ目は、「爆風」です。原子爆弾
の爆発の瞬間は、爆発点は数十万気圧
という超気圧となり、強烈な爆風が吹
き抜けました。人々は吹き飛ばされ、
倒壊した家屋の下敷きになり這い出る

事ができずに亡くなっていました。

この「熱線」「爆風」は原爆投下直後、
多くの被害をもたらしました。全ての
ものを焼き尽くし、皮膚が溶け垂れ下
がり引きずり歩く人々。それはまるで
幽霊行列のようでした。目の玉が飛び
出た人、赤ちゃんに母乳をやっている
姿のまま焼かれた母子など、どのよう
な思いで亡くなっていったのか無念な
気持ちです。

3つ目の特徴が「放射線」です。原
爆の特徴は、通常の爆弾では起こらな
い大量の放射線が放出されることです。
これは人体に入り込み細胞を破壊しま
す。救助のために入った人が被爆後、
月日が経過してから発病し亡くなりま
した。原爆の怖さは、何よりも投下さ
れて終わりではなく、投下されて放射
能という目に見えない形で残り続ける
ことです。一旦放射能が人体に侵入し
たら、その影響から生涯のがれること

はできません。子や孫が生まれるとき
は限りなく不安ですが、その事を誰に
も打ち明けることはできません。被爆
者であることで、偏見や差別を受けま
した。好きな人ができて結婚を断念
した人、幸いに結婚しても被爆者であ
るが故に離婚させられた人など限りな
く多数存在しています。その年の暮れ
までに、広島で14万人、長崎で7万人
が亡くなりました。このような私たち
の体験は、世界のどこにも二度と繰り
返してはいけません。口で言い表すこ
とができないこの世の地獄を体験した
被爆者ですが、報復を叫んだことは一
度もありません。私たちは「再び被爆
者をつくるな」「長崎を最後の被爆地
に」を訴え続けています。核兵器のな
い平和な世の中を1日も早く実現する
ことです。2021年1月22日核兵器
禁止条約は発効。「非人道兵器」とし
てその開発・実験・生産・保有・使用

の威嚇を含むあらゆる活動を例外なく

禁止した国際条約です。この条約は、

現在核兵器を保有している国がそれら

を廃棄するための基本的な道筋を示す

とともに、核兵器の被害者の権利を定

めるものとなっています。核兵器は一

旦使用されれば、取り返しのない

甚大な被害を人間や環境に与えます。

それは戦争での使用だけではなく、核

兵器が存在する限り、誤って使われた

り、テロなどに使われたりする危険性

があるからです。核兵器の全廃こそが

いかなる状況においても、核兵器が二

度と使われないことを保証する唯一の

方法です。被爆者の証言こそ、核廃絶

への道筋を築くものと思います。被爆

者の声を世界に届けましょう。

ところで、ネバダ州の砂漠には、ネ

バダ核実験場（ネバダ・テスト・サイ

ト）があります。1951年に開設さ

れたこの核実験場で、1951年から

1992年にかけて、実に928回も

の核実験が行われました（うち828

回は地下実験）。アメリカは、マーシャ

ル諸島でも126回の核実験を行って

いますが、アメリカが行った核実験の

ほとんどは、このネバダ核実験場で行

われました。アメリカは、1996年

の「包括的核実験禁止条約」に先立つ

1993年から核実験のモラトリアム

（一時停止、猶予）を実施しているた

め、ネバダ核実験場における大気圏内

及び地下での核実験は、1992年を

最後になくなりましたが、臨界前核実

験は今でも行われています。このよう

な過程でたくさんヒバクシャが生み

出されてきました。一つには、「アト

ミックソルジャー」と呼ばれる、核実

験に参加した兵士の被曝があります。

兵士たちは線量を測るフィルムバッジ

が付けられていましたが、アルファ線

のみが測定されていたと言われていま

す。

放射線の人体への影響が教えられる

こともありませんでした。「風下住民

（ダウンウインダース）」と呼ばれる、

放射線降下物にさらされてきた人たち

もいます。ネバダでは、実験場の周囲

において、大気圏内核実験により生成

されたヨウ素131などが広範囲に分

散し、甲状腺ガンの増加をもたらして

いると言われています。ハンフォー

ド・サイト（核施設郡）の放射線物質

で汚染された空気は、ワシントン、オ

レゴン、アイダホ、モンタナ州全域

に、さらにはカナダにまで拡散しまし

た。ハンフォード・サイトの放射能汚

染にさらされた人は、約200万人に

も及ぶと見積もられています。これら

の、アトミックソルジャーや風下住民

は、被曝と健康被害の因果関係が確立

できないとも言われる中、独自の健康

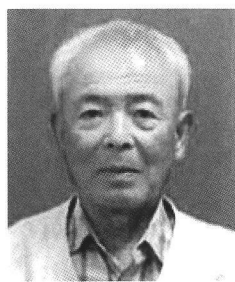
調査を行ったり、資料の公開を求めた

り、裁判をおこしたりするなど、地道で長い闘いを続けています。この施設はすでに稼働していない施設でありませんが、放射能汚染が指摘されています。古代ギリシャ人にとって火は神聖なものでした。原子爆弾は広島と長崎を焼き尽くしました。生き残ったとしても、被爆者の苦しみは今も続いています。「心の中に原子爆弾はまだいる」のです。

原爆が投下されてから75年。被爆者の平均年齢も83才。自らの口で話せる時間は少なくなってきました。しかし、核兵器が地球上からなくなるその日まで、1人1人の心の中の灯は、世界中の良心に訴え続けるでしょう。そして、その灯のバトンをこれからの世代に渡しませう。核兵器がなくなるまで。

寄港地

- 5 / 8 横浜港 出港 ↓ 5 / 12 基隆 (台湾)
- ↓ 5 / 18 シンガポール ↓ 5 / 23 コロンボ (スリランカ) ↓ スエズ運河 ↓ 6 / 5 サントリーニ島 (ギリシャ) ↓ 6 / 6 / 7 ピレウス (ギリシャ) ↓ 6 / 9 カリアリ (イタリア) ↓ サルデーニヤ島 ↓ 6 / 11 バルセロナ (スペイン) ↓ 6 / 14 リスボン (ポルトガル) ↓ 6 / 17 ル・アーブル (フランス) ↓ 6 / 22 / 23 サンクトペテルブルグ (ロシア)
- ↓ 6 / 24 / 25 ヘルシンキ (フィンランド) ↓ 6 / 26 ストックホルム (スウェーデン) ↓ 6 / 28 (コペンハーゲン) デンマーク ↓ 6 / 30 ベルゲン (ノルウェー) ↓ ソグネフィヨルド、ネーロイフィヨルド 遊覧 ↓ 7 / 4 レイキャビク (アイスランド) ↓ 北極圏通過、ケープフェアウエル沖 遊覧 ↓ 7 / 10 ハリファックス (カナダ) ↓ 7 / 12 / 13 ニューヨーク (アメリカ) ↓ 7 / 19
- ↓ 8 / 19 釧路
- ↓ 7 / 22 カルタヘナ (コロンビア) ↓ 7 / 23 / 24 クリストバル (パナマ) ↓ パナマ運河 通航 ↓ 7 / 26 プンタレナス (コスタリカ) ↓ プエルトバヤルタ (メキシコ) ↓ 8 / 7 シアトル (アメリカ)
- ↓ 7 / ジョージタウン (ケイマン諸島) ↓ 7



ピカドン（原爆）の話

外園 二四郎

昭和20年8月9日木曜日午前11時2分。原子爆弾が投下され、爆心地より3・2kmの川平町で被爆しました。当時8才の私は、実家の縁側で4才年下の弟と2人でジャガイモをはぎ（間食）していましたが、ピカッと光りドーンという音のあとの爆風で、2人とも座敷の中まで吹き飛ばされました。家は傾きガラス障子は割れてしまいました。

母親は近くの芋畑で作業をしていましたが、その時は「家に爆弾が落ちたー！」と叫んでいました。私たちは、ただただ怖くて、座敷より中家（なか

え）【土間】、かま家（かまや）【炊事場】、牛小屋、小屋、たなえ【洗い場】という経路を無我夢中で逃げ、漸く敷地内につくっていた防空壕へと逃げ込みました。私は足に軽い怪我をしていましたが、幸い大事には至らず、非難してきた父母、兄弟、近所の人、親戚もみんな怪我や火傷などはありませんでした。

その日の夕方頃から、爆心地近くから非難してきた人の姿も結構見られました。

防空壕は、かまぼこ形で巾2m、高さ2m、奥行き4m位で赤土を掘った

もので何の補強もなく、底にはいなまき（稲藁きむしろ）を敷物代わりにしていました。1週間ほど家族、近所の人や親戚たちと防空壕前で炊き出しをしたりして共同生活をおくり、その後は傾いた家に戻り暮らしました。ふすまや障子の隙間などには、紙などを挟んでしのいでいました。

被爆から76年目になりましたが、当時と今では随分町並みなども変わりました。一番変わったと感じているのは、道です。土道からコンクリートやアスファルト道になり、道幅も広がりまし、たし、飛び石で渡っていた川には、橋

が架かりました。

原爆が落とされたときには、ピカもドンも私たちを吹き飛ばした爆風も『原爆』とは知りませんでした。日が経ち色々な事がわかってくるようになり、自分の友人や周りの人で白血病で亡くなる人もおり、自分の体の事、自分の子ども健康状態については正直なところ心配でした。しかし、会社勤めをしていた時の職場などでは、原爆の事について話したり聞いたりすることは、あまりありませんでした。ただ、検診は欠かさず行き、健康状態については、いつも気に留めて過ごしていましたし、現在もそうです。

今でも、時々ピカドンの事を思い出すときがあります。やはり今思うことは、「戦争」や「原爆」という言葉が世界中からなくならないといけないと思います。

2021年4月11日
の講話より

「戦争と原爆の遺構めぐり」



おいたち

鳥井國臣

当時私たちは長崎市内の興善町でクリーニング業を営んでおりました。人を雇って順調な営業だったようです。母も家業がいそがしくて、幼い私にも子守の人が居て、その人が野母の人だったこともあり戦後野母の地への引越しの理由の一つになったのではないかと思います。まもなく、父は兵隊にとられ仕事もうまくいかなくなっ

て居りました。そんな朝、8月9日朝11時2分。あの忘まわしい原子爆弾の炸裂です。その時私は5才でしたのでよく覚えておりませんが、家が崩れるような大きな音を聞いたように覚えて

います。祖母の話ですが、無我夢中で私を背負い、防空壕に逃げ込んだそうです。まもなく近くから火が出て、私たちも焼け出されてしまいました。幸運にも父が生きて帰って来ましたので、以前のように磨屋町や下西山町でクリーニング屋を始めましたが、得意先の人たちも居なくなりなかなか大変だったように思います。先にも書いたように、昭和28年、私が中学生になった頃、心機一転、野母崎町の脇岬に引越し、そこでクリーニング屋を営業することになりました。私も脇岬村立脇岬中学校に転校し、そこで何物にも代

人が居なくなることが懸念されます。私も70才の時に肺がんが見つかりました。原爆病院の先生も被爆の影響がな
いとは言えないと言っておられました。その原爆病院で手術を受けて早くも10年になります。原爆から助かり、又が
んから助けていただき真に運の良い私
です。

一句

肌身はなさぬ被爆者手帳ころもがえ

國臣



75周年目の思い出

中村 キクヨ

1発の原爆が長崎の街を一瞬にして壊滅しました。21才の私は小瀬戸町（旧小榊村）の自宅の裏庭で生後1ヶ月の長男の下着を干し、異常な空の色に目を向けた瞬間、爆風で飛ばされ被爆し、両親と長男は無事でした。

あの日から歳月が過ぎ、75年目の平和式典が訪れ、コロナの関係で人員の削減もありました中、出席が許され式典に参加することが出来ました。座席に落ち着き静かに目を綴じれば、75年の長きにわたり、亡くなられた多くの被爆者の方々の想い、又、手帳友の会初代会長深堀勝一様、2代目会長井原

東洋一様の姿が目には浮かび涙しました。ご冥福を祈り帰路につき仏前に手を合わせ、過ぎ去った思い出に浸る1日でした。

悲しい思い出は、自宅の前の砂浜に被爆地から船で運ばれてくる若い学生さんたち、水を求め苦しみながら次々と亡くなられた若人、又、親類の叔母メイを父と2人で捜索し、生地獄の様子を見て、ただ泣くのみで何も出来なかったあの日の事、今でも親類が住んでいた岩川町を通る事が悲しいです。私にとって戦後は辛い事が多い中、嬉しい事もありました。戦後1年半振

りに主人が戦地から復員してきました。食糧難で大変でしたが、平和な生活に戻り、その後深堀会長との出会いがありました。

深堀会長との出会いと別れ
放射線による健康被害も明らかに
なっっていく、その為被爆者への補償を
求めて行動する深堀会長に共感して協
力する事になった会の仕事を手伝いな
がら会員数を増やし、手帳申請のアド
バイスをしながら、郡部に数名の会員
と共に苦労しながら走り回り、深堀会
長は支部を作り、最後は五万人の会員

数になり、支部それぞれに東京陳情が始まった。私も数十回共に行動した。会長は病弱のため5回に1回の割合で上京していました。

被爆者の死後33回忌法要の為に会員の皆様から寄付金を頂き、平和公園に現在ある鐘を設置し、同時にソ連（現ロシア）、中国、ハワイにも「平和の証」として「長崎の鐘」を贈呈する運びになりました。

深堀会長の強い希望で実現した真珠湾攻撃謝罪の旅では、アリゾナ記念館等を訪れ、ホノルル市にある「長崎の鐘」を打ち、お互いに平和を誓い合う素晴らしい交流が生まれました。考えれば、これが私たちにとって最後の深堀会長との旅でした。帰国後、特に会長は2、3世問題に取組み始めました。

井原東洋一様より深堀会長の死去の通知を受け、井上病院へ走り込みました。その時はすでに安らかなお顔で永

遠の眠りについておられました。深堀会長と共に平和運動を始めて以来40年お世話になりました。亡くなられた時は、寒い2月でした。初めてお会いしたときは暑い8月でした。井原東洋一

様が6月、友の会の会長に就任されました。深堀前会長が亡くなられて半年後の事でした。会員の皆さんも大変喜び安堵しました。井原会長は行動的な方で、常に国外でも平和活動をされています。会員もそれぞれ自分の立場での運動に取り組み活動されるようになりました。9の日集合の日には、ご自分の活動報告があり、常に平和運動の大切さを聞かされました。

平和式典で「平和への誓い」の述べる2006年（平成18年）に白血病で他界した二男の事に触れ、被爆2世、3世の援護の切実さを訴えたその後、多くの方々から電話や手紙を頂き、反

応の大きさに心打たれ、集会等では、2・3世の問題を取り上げて話をする事が多くなりました。

ピースポート地球一周に参加する

船中被爆体験や2世の子どもたちの事も話し、グループでいろいろと語り合い、被爆者の皆さんも大いに発言され、毎日が勉強の船旅でした。700人の乗船者の中には未だ被爆の実態を知らない方もいて驚きました。運動の大切さをあらためて感じました。船中で、世界的に知られているサーロー節子さんと場所的にお会いするようになり、共に運動させて頂いた。

又、被爆者代表として男女4名下船し、国連本部で証言をする為ニューヨークへ向かった。2週間の予定で節子さんと同じ部屋に宿泊しましたが、国連で証言する為に毎夜勉強されている節子さんの姿にただ驚くのみで言葉

も出なかった。節子さんが何時も「自分の被爆体験を語るだけではなく、核廃絶がなぜ必要なのかを交えて伝える事が重要です。」と言われ、国際的な問題等次々と語り聞かせて頂きました。

翌日、国連本部の第2会議室で、私の体験を語り、多くの外国人の方々からしっかりと握られ、「年をとった貴女から真実の言葉を聞けて感激した。」そう言われたときは、嬉しかったです。その時思った事は、飾らない言葉が一番大切だということです。共に過ごした2週間は、今でも忘れられない時間でした。サーロー節子さんありがとうございました。

韓国訪問（2009年／平成21年）

高校生と共に韓国を訪問しました。以降2012年、2014年、2017年の計4回訪問をさせて頂きました。毎回高校生と行動する度に若者のエネ

ルギーを頂き元気になりました。毎回、現地の高校生と核兵器廃絶を求める署名活動を行い、在韓被爆者との交流会にも共に参加しました。釜山駅前で韓国の高校生と共に街頭原爆展、署名活動等、被爆者の私たちはとても行動できない事を一生懸命に取り組む姿にただただ頭が下がる思いでした。今後ますます若者の交流が必要になってくるのでは、継続してほしいと同行する度に痛切に感じていました。

トルコ訪問（2010年／平成22年）

トルコ訪問では、多くの市民の方々と交流しました。話の中で明治3年（1980年）、和歌山県でトルコ船

が遭難し、日本人が200人のトルコの船員を助けた事を、今も学校で教えられていると語られました。私たちは被爆体験を話し、涙を流しながら聞いてくれました。お互いにとって深い、

良い交流となりました。又、イスタンブールとアンカラをで訪問した2校の高校でも、核の問題を真剣に聞いて頂き、核廃絶の署名も書いて頂きました。

スペイン訪問（2013年／平成25年）

ゲルニカ市民も長崎と同じで、1937年（昭和11年）無差別爆撃を受け、大きな被害を受けた方々と交流しました。やはり、被害者の遺族の方が多く、同じ立場の苦しみを伝えていく事を約束し、井原会長が協定を結んでお別れしました。協定日には、多くの市民の方や役職のある方々が参加され、立派な協定式でした。

核兵器廃絶国際キャンペーン

（ICAN）（2017年／平成29年）

核兵器禁止条約国連本会議採択実現に貢献されたICANがノーベル平和賞を受賞しました。国際的にも立派な

方だと尊敬しているサーロー節子さんが代表して挨拶をされました。

マイクロフィルムの奉安

(2018年/平成30年)

平和公園中心にある碑に、その年死去された3、511人の名前を刻んだマイクロフィルムを納め、ご冥福をお祈りしました。被爆から73年目の夏でした。

井原会長との別れ(2019年/令和元年)

平和運動に最後まで携わられ、世界の子どもたちに核のない世界をと常に叫んでおられた井原会長の死に直面して驚き悲しみました。友の会の会長に就任されて以後13年間休む間もなく、常に平和運動に携わり、何時も力強さを感じさせる方でした。私も常に会長代理として、色々と集会の場に出席させて頂き、勉強させて頂きました。考

えてみれば、今それが私の運動の糧となり力となって生きていると痛感しています。友の会2代目会長として、責任を果たされた事を感謝しても、会長の耳には届く事はないでしょう。井原会長が望まれていた三代目会長として朝長会長に就任して頂き、今は会員の方々共に平和運動に励んでいますので、安心してください。

ローマ教皇来崎(2019年/令和元年)

ローマ教皇が長崎より雨の降る中で、「核兵器のない世界を」と発言された事は、全世界の人々の心に響いたと思います。被爆者運動をしている多くの方々に力と勇気を与えてくださいました。

終わりに

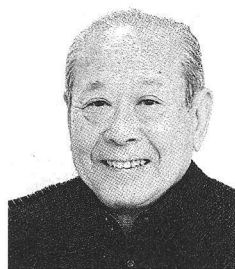
今後の核に対する運動は世界に向けて発進していかнаければと思います。

若い人たちの核に対する学習等大いに進めて、できれば国外での運動も取り入れ、若人との交流を進めて頂きたいです。

手帳友の会は、これからも会長を先頭に皆さん共々立派な被爆者団体としての活動を望んでいます。又、外国との交流を多く望んでいます。

私も今96になりました。75年目の式典に参加する事ができ、大きな節目を頂きました。

これからも、元気であれば少しでも被爆者として運動に参加したいと思えます。



8月9日とその前後の思い出

福田 貢

昭和20年頃は、父の実家のある佐世保市若葉町と長崎とを頻繁に行き来していました。佐世保には、病弱な祖母が一人暮らしをしており、父は長崎県警情報課勤務でしたので、母が時々面倒を見に行っていました。父の兄と弟は戦地に赴いていて、父は満州の部隊にいましたが、昭和18年3月に召集解除になり帰国していましたので、父が面倒をみていましたが、長崎と佐世保なので満足にお世話が出来なかったのだ、昭和19年10月頃、母と私たち子ども4人は、若葉町に移り住みました。私は昭和20年4月に潮見国民学校に入

学致しました。国民学校とは、昭和16年公布の国民学校令によって今までの小学校を国民学校と呼ぶようになりましたが、内容は皇国の道に則って国民的基礎的錬成を成すという超国家主義的教育を謳った軍国色の強いもので、昭和23年に元の小学校に戻りました。戦況に関しましては、昭和17年4月18日に米空母より発進したB25が東京のほか5都市を爆撃した本土初の空襲だったとの事でした。昭和19年6月頃には、九州の諸都市も爆撃されるようになり、軍都佐世保も間近いと察した父は、家族がばらばらになってはいけ

ないと思い、祖母と私たちを19年5月頃迎えに来て長崎に戻りました。当時、長崎、佐世保間には直行列車があり、今の快速列車のようなもので、よくこれを利用していました。大村、川棚を通過する際は、軍需工場が見えないようにする為にブラインドを降ろすように車掌が云って廻っていました。当時は木で出来ていてヨロイド銃戸と云っていました。父の姉の夫は佐世保の福石観音前の線路沿いで田代内科を開業していましたが、強制疎開の為、私たちが出た家に入居しましたが、昭和20年6月28日、9日にかけて焼夷弾による市街

地攻撃により、実家も焼夷弾が命中し焼失しました。当時の住居の約35パーセントに当たる約12、400戸が全焼し、死者も約1、100人を数えたそうです。さて、原子爆弾投下の8月9日は、私は上長崎国民学校1年生で、近所の家に集まり、5、6人で自習をしていました。場所は西山2丁目で県立高等女学校（のちの長崎県立東高等学校）の運動場の片隅にプールがあり、その横の道路を跨いで石段を下った所の家で、我が家と同じ苗字でした。自習は9時頃から始めましたが、11時ごろ自習に飽きて、その家の庭に出て空を眺めていましたら、飛行機の爆音が聞こえてきましたので、浜の町上空の方に目をやり見ていましたら、キラリと光る青色とも橙色ともつかぬ閃光が走りました。その後、顔をストروبに近づけた位の熱さを感じましたので、咄嗟に目の前の防空壕に飛び込みまし

た。色々の大きな音の中で、自習していた家のおばさんが甲高い声で「テールの下に隠れなさい」というのを聞いた後は覚えていません。何時間経過したか解りませんが、長い事、防空壕の中でじっとしていましたら、姉久子当時9才が捜しに来ましたので、恐る恐る外に出て、階段を上って道路に出ると、目の前を戸板乗せられ腹から腸が垂れ下がっている人が運ばれているのを見て、怖くなり又急いで防空壕に戻りました。家に何時頃帰ったかは覚えていません。佐世保の田代病院の長男、田代正が昭和20年4月より長崎医学専門学校に通っていました。父の姉の子です。8月9日の朝に学校に行くと言うので、母が広島に新型爆弾が投下されたので、登校するのを止めるように云ったら、学業が遅れているからと云って出かけたそうで、夕方遅くなっても帰りませんので、母と私たち

は家の前の道路に立って、母は学生さんらしき方に、「医専の田代正は知りませんか」と夜遅くまで尋ねていました。被爆し浦上方面から金比羅山を越えて下ってくる人は夜中も続いたそうです。山の向こう側の空は赤く染まり、不謹慎ですが綺麗だった事を覚えていません。何時頃寝たかは覚えていません。翌日の10日8時頃、心配していた従兄の正兄は棒切れを持って帰って来ました。私たちは喜んで出迎えました。父の話では、医専の裏の穴弘法山を棒を杖代わりにして帰って来たそうで、苦しそうだったと云っていました。無傷で帰って来た正兄は、春頃から具合が悪くなり、佐世保より医師団を引率して救護班長として来ていた田代伊平伯父が、仕事の合間をみて、息子の診察に駆けつけましたが、診察では、どうも心臓脚気のようなと云われたので、父寛吾は馬町にある医院に事情を話し、

注射液剤を頂いて来たとの事でしたが、私たち子どもは隣の部屋の片隅に居りましたが、午後二時頃母由子が泣き出しましたので、臨終だったのでしよう。自分は畳の上で死ぬとは思わなかったと云い、もう目が見えなくなつたと云つた後、1人1人の兄弟の名を呼び、最後は「お父様お母様お世話になりました。」と云つて息を引き取つたとの事でした。伯父は、その日の夜は息子を抱いて寝たそうです。11日の朝から伯父に父は経済専門学校のプールの横の空き地で強制疎開させられた家の木材で、茶毘に付しましたが、何度も米軍機が飛来するので、警防団の方が早く火を消せと大声で警告されたそうですが、火葬の真つ最中でどうにもならず、焼けにくい所は竿竹でつついて焼いたそうです。私が見に行きましたら、父から追いつ返された事をかすかに覚えていません。当時は、原子爆弾が炸裂す

る時に強力な放射線を放出する事も、又、放射線を浴びた物体が放射能を放出する事は、日本では一般にはまだ未知の分野だったかも知れませんが、又それらが人体に悪影響を及ぼすとは知らなかったでしょう。伯父が首をかしげて、心臓脚気のようなと云つたのも無理もない事でしょう。その伯父は昭和22年に他界し、伯母は肝臓で亡くなったと云っていましたが、多くの被爆負傷者の診察や手当等を行い、又、放射能を持った息子を一晚中抱いて寝た事は放射能物質を抱いて寝たのと同じで、私は原爆による死亡と思つていません。当時、父の職務は警備本部の伝令長と立山防空壕の知事室の脇に格納された御真影（天皇陛下の肖像写真や肖像画）の護衛だったとの事でした。12日に永野知事が新興善国民学校の救護所を巡視する事になり、誰もお供をしなかったので、父が秘書代わりにお

供をしたそうです。救護所に充てられた講堂の有様を次のように綴っています。講堂は満員で既に亡くなった人、虫の息でかすかに指先を動かしている人、瀕死の親子、黒焦げになって転がっている死体の口から口から目から鼻から耳からウジ虫が這い回っているという、*「焦熱地獄」*を目の当たりにされた永野知事は、「どうにかならぬか。」と話され、主任医師は、「もう感覚もなく、ただ動いているだけです。手当てするにも薬品もありません。」と報告していたそうです。顔を思わず背けたくなるような悲惨な光景でした。と書いています。8月13日9時頃長崎駅から早岐駅経由で佐賀方面に向かう日赤救護班の臨時列車が出ると、多分佐世保より救護班長として来ていた伯父から連絡を受けたのでしよう。祖母と母と私たち子ども4人は郷里の波佐見に避難する事になりました。旧国鉄職

員のお話では、長崎、道ノ尾駅間の復旧工事は原爆投下の2日後に国鉄職員と軍隊200人を動員して、8月12日にはテスト運転を済ませ、1週間後から運転再開したそうです。祖母は人力車に乗せ母と私たち子どもは西山2丁目の自宅から駅まで歩きました。車内は怪我の負傷者で溢れ、父は目を覆いたくなるような光景だったと綴っていますが、私もその光景を見たのでしようけど、記憶にありません。列車は人の歩く速さで進行しました。私と姉はデッキから外を眺めていました。多くの死人や馬が道路に転がっている場面も見ました。浦上川に差し掛かると、川で多くの人が死んでいました。熱くて飛び込んだのか、水を求めたのか解りませんが、道ノ尾近くでは左方向に馬車があり、馬車引きは死んでいて馬は首を振っていたのが、長い事脳裏にありました。私と姉はほとんどデッキ

に居て外を眺めていましたので、車内は満席で座る事が出来なかったのかも知れません。母の前の座席には女学生が3人座っていたので、にぎり飯を差し出しましたが、食べれないと云ったとの事でした。彼女たちは学徒動員の女子挺身隊で、三菱の魚雷工場で被爆したそうで、熊本に帰ると云っていたそうです。早岐駅では長崎に向う父の姉（田代春子）に遭遇し、母は無言のうち正兄の遺骨を手渡したと言っていました。おそらく余りにも悲しくて言葉が出なかつたのでしょう。三川内駅から波佐見の皿山まで歩いたのでしようけれど、記憶にありません。親戚の松尾家に着いたら、父の長姉が来ていました。佐世保市光月町で田崎小児科医院をしていましたが、佐世保空襲で焼失したとの事でした。夜には父が居りませんでしたので、私たちを波佐見に送り届けた後、とんぼ返りで長

崎に戻ったのでしよう。後日母が被爆者手帳を役所に申請に行き、13日に長崎駅から汽車に乗ったと云ったら、等口の係は、「奥さんは嘘をついている。」と云って、汽車は道ノ尾駅からしか出ていないと云われたとの事。13日に日赤の救護班の臨時列車が出た事を係に伝達して居なかつたか、又は、役所自体が知らなかつたのかも知れません。人の運命は誰が決めるのでしょうか。もし8月9日に従兄が登校していなかったら、伯父の医院を嗣いでいた事でしょうし、又原爆を吊した落下傘が風に流されず目標通りに浜町上空で炸裂していたら我が家族全員が此の世に居ない事になります。昭和20年6月末には、日本の沖繩守備軍は全滅し、次は日南海岸に米軍が上陸し、本土決戦と云う筋書が長崎への原爆投下で無くなりましたが、もし原爆投下がなく、米軍が日南海岸に上陸していたら、私

共子供は、手足まといになるので、父が職務上下^サげていたサーベルで刺し殺し北九州方面に父と母二人で逃げる手筈を整えていたとの事でした。この話しは随分と後で聞きましたが、私は特に驚きませんでした。その当時は誰もが正常な判断力を失っていたようでしたので、昭和27年頃、母の高女時代の友達が訪ねて来て、北満州から逃げて来る話を一晚中話していました。内容は中国と朝鮮との国境にある鴨緑江^{オウリヨクコウ}の橋が、爆破されていて渡れず、後方には八路軍が迫っていたので、父親は二人の娘を拳銃で撃ち小学6年生の長男は自分で撃ちたいと云って撃つたとの事でした。その後八路軍に捕まり、

たので、その頃まで引揚げは続いていたのでしよう。引揚者の中には人に云えぬ秘め事を背負って帰国した方も数多く居た事でしょう。

夫は殺され自分は将校の身の廻りの世話をさせられたとの事でした。又27年には佐世保の従兄、田崎誠治兄がソ連に長い事医師であった為に抑留されていましたが、父に帰国の挨拶に来まし



私の希い（願い）

本村 ちよ子

最近の私にとって忘れられない嬉しいニュースがありました。

昨年10月25日の朝のことです。被爆者として76年生き永らえて来た私にとって待ちに待った「核兵器禁止条約来年1月発効」と決まったニュースでした。

その日午前中は、友人・知人は勿論小さな子どもたちからまで「おめでとう」の電話をいただきました。

この日を待ち望み、平和運動、核兵器廃絶を訴え頑張ってきた被爆者を始めその家族、そして優しさに溢れ、平和の活動を応援し支えてくれた被爆二

世、三世の人々、決して平坦ではなかった平和運動の辛さを多くの長崎の人（ながさきもん）は知っています。

今は亡き山口仙二さん、ニューヨークの国連本部の壇上で自らの被爆火傷の背を示し「私は見せものではありません。これが被爆の現状なのです。」と訴えてこられた谷口稜暉さんはどんなにか泉下で喜んでいることでしょう。

コロナコロナで明け暮れた1年余り。三密だ、自粛だ、まん防だとゴールデーンウィークでさえ家に籠らざるを得なかった人々は、途端に不自由を口にし、不満を漏らしていました。私はあの

戦争中に比べれば「食べるものはある」と妙に落ち着いた老人でした。

その私が被爆したのは6歳の時、当時の国民学校に入学したばかりの夏休みでした。

家は農家で出征中の父を除く6人家族でした。間もなくお昼という時間帯、田の草刈りに出かけている祖父たちの食事の準備に台所にいた祖母、私は一人縁側で遊んでいた時です。異様な真昼の閃光と爆風、物が倒れ壊れる音、息苦しい土埃り、私は咄嗟に台所から駆け付けた祖母に庇われ一瞬をやり過ごしました。気がついたとき祖母の背

中は血に染まっています。薄い硝子の破片と散乱したものが祖母の上に降り注いだのです。

気丈な祖母はそれでも私を横抱きにして、防空壕に運び入れてくれました。爆心地から4・5キロメートルの地でありながらも原爆の威力の凄まじさは筆舌に尽くし難いものがあります。

それから半年、祖母は田舎であるが故充分な手当もできず、寒い冬を囲炉裏の火で耐えたのに3月21日、私の1年生最後の日に息を引き取りました。

あの日から76年、日本は再び戦争をすることなく、私たちのような悲惨な被爆者も過去の歴史の存在でしかなかった。なりました。

しかしこれが本当の平和なのでしょうか。私は日本という国に生まれたことを誇りに思っています。そして、ここ長崎が大好きです。「核兵器禁止条約」の批准に応じてくださった54ヶ

国・地域の方々に心から感謝とお礼を申し上げます。

私の誇りに思う日本が、唯一戦争による核兵器被爆国である日本が、批准国でないことは何故でしょうか？ 私たち被爆者の願いに背を向ける偉大な力を想像してしまいます。

思えばこの1年余りを人類は新型コロナウイルスの脅威にさらされ、世界中が力を合わせ医療・感染対策に当たり、目に見えぬウイルスと闘ってきました。いまだに終息には至りませんが、日々努力を重ねていることは報道により老いた私も知っております。

ウイルスとの闘いにこれほど世界が一つになれるのに、紛争や小競り合いが絶えないのは何故でしょうか？

地球は誰のものでもありません。平和を、戦争の脅威をもたらす「核兵器の廃絶」を急いでください。



私の原爆体験と戦後75年の人体影響の研究を振り返って

朝 長 万左男

これは長崎地方裁判所における新安保法制違憲訴訟への意見陳述を平成31年4月30日に要請された時にまとめた私の原爆体験と医師となつてから約50年の原爆の人体影響研究の概要をまとめたものです。

このたびの日本政府による新安保法制は日本国憲法に違反する事柄が含まれており、日本の将来の平和基盤を危うくすると考え、ここに反対意見を陳述いたします。

1 私の身上
(1) 原子爆弾の洗礼
私は昭和18年6月5日に長崎医科大学病院の産科で生まれ、昭和20年8月

9日午前11時2分、2才2カ月のとき爆心から2・5kmの中町の自宅で、広島に次ぐ2発目の原爆の洗礼を受けました。前日の8日の11時頃、医科大学病院の耳鼻咽喉科を扁桃腺炎による発熱で母に連れられて受診し、帰宅後はずっと臥床していました。幸運にも自宅が山陰にあつたため半壊ですみ、母子とも無傷でしたが、約15分後にはこの長崎駅一帯は焼け野が原になって

いました。私は布団の中にいましたが、倒れた梁や柱にも挟まれず、母親に救出されました。諏訪神社に逃げ込んで一晩を過ごし、朝長家の出身地の大村市の親類宅に疎開し15日の終戦を迎えました。小学校に入る前に祖父が筑後町に内科医院を再建し、一家で長崎市に帰りました。

(2) 家族の戦争および原爆体験
父、朝長正允(まさのぶ)は、先の大戦では、長崎医科大学在学中の昭和16年、対米開戦となり、半年繰り上げ卒業し、軍医となり東京陸軍病院に配

属されました。昭和17年に結婚したあ

めました。

と、すぐに戦地のビルマ（現ミャン

原爆では幸い死者はでていません。

マー）に派遣されました。英軍の反攻

なお母方の祖父は終戦時に陸軍少将で、

により19年には台湾の屏東（ピント

長崎連隊区司令官であったため、原爆

ン）陸軍航空隊に転進し、そこで原爆

直後の浦上の惨状に直面しました。本

による長崎市全滅の報に接し、家族の

人はその惨状に対してはほとんどなす

生存をいったんあきらめていましたが、

すべもなかったと言っておりまし

数週後に、母の路（みち）から手紙が

この状況でかなりの残留放射線を被曝

届き、母子の生存を知りました。その

したと思われ、72才で亡くなるまで病

後1年以上の捕虜生活をへて復員し、

気がちでした。

長崎医科大学病院に復帰し、助教授と

(3)父正允の原爆後障害研究

なり診療活動を開始しました。白血病

昭和24年頃より、被爆者の集団から

を発症し昭和26年になくなられた永井

白血病が急増して来て、父は直ちにそ

隆博士の治療も担当しました。

の疫学研究に着手し、その結果を国際

朝長家の親族では、この大戦で戦死

ジャーナルに発表しました。原爆放射

したものの3名、インパール作戦に従軍

線による白血病誘発の最初の英文報告

して奇跡的に生還した叔父、予科練出

として世界的に注目されました。父は

身で特攻隊員となっていたものの終戦

昭和35年、広島大学に新設された原爆

で生還した叔父、インドネシアで戦っ

放射線医学研究所の初代内科教授に就

た叔父および私の父（全て大正生ま

任し、広島にも研究を拡げました。昭

和42年長崎大学に新設された原爆後障

害医療研究施設（現研究所）の初代内

科教授に就任し、長崎に戻り、研究継

続中の昭和46年7月11日、53才で悪性

リンパ腫のために仆れました。

(4)戦後の平和と苦難の日々

母は戦後、長女と二人目の男子を生

んでいますが、この次男は不幸にも先

天性の胆道閉塞症を持って生まれ、当

時はまだ手術不可能であったため、3

ヶ月しか生きられませんでした。母自

身は現在95才で脳梗塞のために長期療

養中ですが、この次男の先天異常が原

爆放射線のせいではなかったかといま

でも愚痴を漏らします。また本人もそ

の後、昭和25年に左大腿骨の骨肉腫で

左足を90%切断するという不運に見舞

われました。これも原爆のせいだと思

っている節が多分にあります。私の家族は敗戦後の日本の復興の過

程において、新憲法の発布があり、民主主義が発展しはじめた昭和25年に小学校に入学、新しい教育のもとで、象徴天皇制や憲法の戦争放棄の条項などを熱心に教師が教えたことを鮮明に記憶しています。日本全体がまだ貧しい中にも明るかったと思いがあります。これが平和だと後から実感しました。

この頃、母と弟の病気などがありましたが、父が復員後に明るい表情で、活気のある診療と生活をしていたことが鮮明な記憶として残っています。特に幸いにも戦地から生還した父が日夜、原爆被爆者の研究に没頭していた姿がまぶたに浮かびます。

2 私の放射線障害研究

(1) 医師への道と原爆研究のスタート
2・5 kmで被爆した私は幸いにも原爆後遺症を発症することもなく過ごしていましたが、昭和30年頃、中学、

高校の同世代のヒバクシャに増加していた白血病にはかなりショックを受けました。長崎大学医学部入学後は、被爆者医療、特に白血病について図書館で勉強強し、昭和43年に卒業後は、直ちに原爆後障害医療研究施設（現研究所）に就職し、内科医として勤務を開始して、平成2年内科教授となって65才で定年を迎えるまで、40年間、原爆ヒバクシャの医療と原爆後障害の基礎研究に従事しました。その間の主な研究論文を末尾に添付しました。

定年後は平成19年から平成24年まで日赤長崎原爆病院院長に就任し原爆医療を継続しました。45年間、全医師人生を原爆研究に捧げました。その後、現在まで純心聖母会長崎原爆ホーム診療所において所長として約400名の入所被爆者の診療に当たっています。入所者は女性が約8割を占め、平均年齢は82才となっています。家族を原爆

で失い、独り身の方も多く、孤独のうちになくなる方も少なくありません。ヒバクシャにおいては、73年後の今もなお、白血病と癌の発生が持続しています。また二つ目、三つ目の多重癌を発病する人もあとを絶ちません。この長期の疫学研究が私の研究の主要な部分で、これはヒバクシャが戦後の長い年月をかけて自らの身体によって実証してきた結果です。

この間の私自身の健康は幸い良好でしたが、常に癌や白血病を発症するかもしれないという不安感にしつこく悩まされました。75才になった昨年5月、自分で定期的に行っていた癌検診で前立腺癌を発見しました。幸い早期診断であったため、最新の重粒子放射線治療を佐賀ハイマツト（鳥栖市）で受けることができ、現在は完全に寛解して健康状態は良好です。

(2)生涯持続する原爆放射線の影響

私が最も驚いた現象は、通常のタイプの白血病の発生が1948年頃から1970年代の終わり頃まで続いた後、ほぼ終息したかにみえたのですが、80年代に入ると徐々に骨髄異形成症候群(MDS)という高齢者に特有の白血病類縁疾患が徐々に増え始め、2000年代に急増してきたことでした。長崎の全被爆者で詳細な統計を取ったところ、近距離被爆者(すなわち高線量被爆者)で、一般市民の約4倍にまで増加していることが判明しました。被曝線量が多いほどMDSの発生率が上がることも明らかになり、これは米国の癌学会ジャーナルに発表し、原爆放射線の人体影響が生涯持続することが確定した事実として、医学界および被爆者さらに核廃絶運動界に大きな衝撃を与えることになりました。MDSの患者の約半数はその後急性白血

病に進展しますので、事実上、ヒバクシャでは白血病がほぼ生涯にわたり持続していることになりました。これ以来、海外にも出かけてこの事実を発表し続けて、今では世界的に広く知られるようになりました。

なぜ生涯持続するのだろうか？私のも他、研究仲間には次のように考えています。まず放射線に被曝し、細胞の核の中にあるDNAの鎖が切断されます。このDNA鎖には約27,000の様々な遺伝子が乗っていますが、それらの一部が傷つき、最終的にいくつかの遺伝子異常が複合的に、癌や白血病・MDSを生じる特有の遺伝子変異を引き起こし、発病していることが次第に明らかになってきています。このような遺伝子変異の数は30以上にのぼります。従って、原爆放射線の人体影響はDNAを標的とした遺伝子変異によるものと言えます。核兵器は遺伝子

を標的とする、と結論づけられます。

(3)なぜ70年も持続するのか

さらにもうひとつ、70年以上たった現在もなお原爆後障害としての白血病(MDSを含む)や癌が発生し続ける理由がだんだん判ってきています。各臓器には幹細胞と呼ばれる細胞が少数存在しております。じつはこの細胞だけが、人間の体内で生涯にわたって生き続けることができる細胞なのです。胎児が母親の胎内で成長する過程において、父と母の精子と卵子が合体して受精卵となり、細胞分裂を繰り返すことによって、胎児が形成されていきます。この胎生期には、各臓器の幹細胞が生み出され、臓器の原型が形成されます。その後、この臓器の幹細胞はたくさん成熟細胞を作り出します。その結果、心臓、肺、肝臓など10以上の大きな臓器が形成されます。このよう

な臓器の成熟細胞の寿命はどの臓器でも驚くほど短く、たとえば骨髄にある造血幹細胞からできる白血球は2週間、赤血球は3ヶ月程度で、死滅します。しかし幹細胞からは毎日、成熟した細胞が新生され、供給されますので、臓器はそのサイズと働きを、生涯にわたって維持し続けることができます。

これがわれわれの身体の全ての臓器の一生ということになります。

われわれ専門家は、この臓器幹細胞のみが70年〜80年と長期に生き続けることができる細胞であることから、その細胞のDNAの遺伝子が1945年に一瞬にして原爆放射線で切断され、傷ついたものと考えています。そしてヒバクシャの生涯にわたって、この幹細胞は生き続け、その間にDNAの傷は拡大していき、ついにはがん細胞が生まれてしまうことになります。現在もこの幹細胞のDNAレベルの研究

が続けられており、まもなく原爆の放射線による後障害の全容が明らかにされると思います。この生涯持続性の発見がわれわれの研究の最大の成果です。われわれは同時に、この科学的知見が原爆の非人道兵器であることの証明でもあると考えています。

(4) 精神的影響も生涯持続性

以上の研究と並行して、私は被爆者医療の専門医として1000名以上のヒバクシャおよび県内で発生する白血病患者を治療してきました。17才で被爆した女性被爆者のおひとり、私から白血病の病名を告知されたとき、反射的に「先生、やっぱりこの60年間わたくしの身体のなかには原爆が潜んでいたのですね」と、彼女の全人生を支配していたと想像される苦しい胸の内を吐露されました。彼女は発病後3年あまりで亡くなりましたが、その直前

に女優の吉永小百合さんが講演で長崎にお見えになり、吉永さんがテレビドラマ（NHK夢千代日記）で白血病患者をやられたお話をされ、彼女を励ましていただきました。彼女の心情は私を含め全ての被爆者において生涯にわたる共通の不安と恐怖なのです。被爆者はこのために鬱病や外傷後ストレス症候群（PTSD）などの精神疾患が多いこともわれわれの研究は明らかにしています。

長崎大学病院で一緒に仕事をした看護助手の方は7名の兄弟姉妹のなかでただ一人生存しました。75才の人生の中で長年つづく鬱状態に悩まされ、なおかつ最後には胃がんとMDSに罹患するというつらい人生でした。しかし自分の身体に鞭を打って海外まで出かけ、ローマ法王にも被爆体験と核廃絶を訴えて、生きがいを自ら創っておられました。最後は多重癌に罹り、人生

を閉じられました。

このようにわれわれ医師の研究は、核兵器の爆発がいかに非人道的な結末をもたらすかを余すことなく証明し尽くしたと言えます。

3 医師として核廃絶運動へ参加

原爆放射線の生涯持続性を見つめてきた医師・医学者としてのキャリアーから、人類が核兵器をこのまま持ち続ける、ついには核戦争の勃発あるいは意図しない核爆発事故により人類破滅の危機に瀕することを確信するようになりました。このことを長崎から世界に発信する決意を固め、1980年代はじめから核兵器廃絶を目指す核戦争防止国際医師会議（IPPNW）に加入し国際運動を続けて参りました。

IPPNWはまだ冷戦の続く時代の1985年に、米ソや日本の広島、長崎などの約60万人をこえる医師の団体

によって結成され、米ソの指導者に働きかけて、核実験禁止の実現に貢献した功績でノーベル平和賞を1985年に受賞しています。10年前にIPPNWが創設した若い世代による国際核廃絶キャンペーン組織ICANにも参加し、ヒバクシャとともに核兵器禁止条約の実現にも努力してきました。

2017年、ついに禁止条約が122カ国の賛成で採択されました。ICANはこの功績で一昨年ノーベル平和賞を受賞しました。採択後は、条約の署名・批准を進める国際署名活動を展開し、50カ国を超える批准により条約が発効することを現在目指しています。禁止条約に署名を拒否している日本政府へもわれわれヒバクシャは署名参加を呼びかけています。

日本政府は、日米安保条約に基づく米国との同盟を重視していることから、全ての核兵器国と同じく、禁止条約を

拒否しています。これまで長年、唯一の被爆国として国際的な核廃絶運動の先頭に立ってリーダーシップを発揮してきましたが、今回の条約不参加によって日本の国際的地位はもろくも失墜しました。

日本政府（外務省）はこの国際的失墜を挽回すべく、9カ国の核兵器国側と122カ国の非核兵器国側および市民社会（ICAN）との間に生じた、核なき世界を目指す方向性における深刻な分断をなんとか埋めようと、「核軍縮を進展をすすめる賢人会議」を2018年に設置しました。海外（米・ロ・仏・中・豪・ニュージーランド・カナダ・エジプト）から10名、国内から6名の核問題専門家を会議メンバーとして任命し、私も被爆地ナガサキを代表して招かれました。これまで4回にわたり会議を続けてきましたが、いよいよ、本年夏に、賢人会議の提言に

基づく「国際会議」が核兵器国と非核兵器国、および市民社会の代表を日本が招き、日本で開催される運びになりつつあります。核なき世界を目指すこのような政府系と民間の合同会議が開かれれば世界で初めてとなります。

4 新安保法制の違憲性について

(1) 核兵器による戦争抑止論と新安保

法制の積極平和主義の近似性

核兵器によって戦争を抑止できるといふ思想と安全保障政策は、米ソの冷戦によって生み出されました。互いに多数の核兵器を保有し合えば、もはや一方的に核によって相手を屈服させることは不可能となるという、相互確証破壊(MAD)の理論が、冷戦(Cold War)から熱戦(実戦争)を防止したと信じられて来ました。この核抑止論とこのたびの新安保法制の根幹にある思想は、ともに武力によって戦争を抑

止し、平和を維持できると考える点で、きわめて高い近似性が認められます。まさに双生児といえます。

安倍首相は常々、集団的自衛権と十分な軍備によって発揮される抑止力こそが平和をもたらすと主張し、これを日本の積極平和主義であると唱えて世界を回る外交を行っています。これ

で日本国憲法の平和主義によって培ってきた狭義の自衛権に基づく専守防衛によってよって平和は維持できると考えてきた、歴代政権の政策とは大きく異なってきた。この二つの政策のどちらが日本の将来の、そして世界の平和を保障するか、これを決めることが本事実の本質であります。日本の米

ローバルな軍事再編の一環として日本に駐留する米軍の再編成される動きともリンクしていることを理解することが重要です。米軍との同盟関係をこれまでの日本側の片務的なものから双務的なものに改変していくことを目指す国内の現在の動きを、国際的視野で見つめる必要があります。

(2) 不戦条約から国連憲章をへて日本

国憲法を貫く平和主義

戦争と平和を巡る人類の歴史をここで振り返ってみたいと思います。2000万人の犠牲者を出した第1次世界大戦の悲惨な結末から芽生えた戦争を禁止するという画期的な思想が、主として戦勝国の米英仏の指導者の間において次第に確立し、1930年、パリにおいて世界で初めて不戦条約が成立しました。旧日本帝国政府もこれを批准しました。しかし、すぐに日本

による中国侵略（満州事変）とイタリ
アによるエチオピア侵略によって不戦
条約は反故にされ、有名無実の存在と
なりました。やがて世界の流れは第二
次世界大戦へと突入し、世界の平和は
大きく損なわれ、7千万人の犠牲者を
招く結末をもたらしました。日本では
犠牲者は300万人を超えています。

しかし、ドイツと日本に対する連合
軍の勝利がほぼ確実となった1943
年以来、米国のルーズベルト大統領に
よって主導された国際連合（国連）設
立への動きにおいて、その設立理念に
不戦条約の理念が再登場して、国連憲
章として実現されることになりました。
その結果を世界的な視点から見ても
ると、国連と国連憲章の成立以来73年
にわたり、大同土が正面から戦争を
することは、ほぼなくなっていること
は歴史的な大きなことであります。し
かし今なお多くの国際紛争が地域紛争

の形で慢性的に繰り返されており、人
類の真の戦争克服はまだ道半ばといわ
ざるを得ません。

日本国の新憲法の前文から9条まで
の戦争放棄の理念は、パリ不戦条約と
国連憲章を踏襲するものであって、連
合軍、特に米国に押しつけられたとす
るような現政権の考え方は以上に述べ
た国際的不戦の思想に対する偏見で
あって、現在の政府主導の憲法改正案
は、その根本において誤りがあると言
わざるを得ません。戦後の長い平和の
継続は専守防衛による平和外交のなせ
る成果でありました。これは、連合国
による占領統治の5年間とその後のサ
ンフランシスコ条約による日本の主権
の回復戦後の長い平和な日本の戦後レ
ジームがもたらされた事実をわれわれ
は肝に銘じなければなりません。もし
戦後レジームを否定するのならば、さ
らには日本（大日本帝国）の戦前レジー

ムの回帰を目指す意図が隠されている
とすれば、国連主義の戦後の世界平和
の基盤に対して、日本は逆らうことに
なる点で、第2次世界大戦（太平洋戦
争）の結末を自ら否定することともな
り、これはかつての敵国で今は同盟国
である米国も当然認めることではないと
言わねばなりません。安倍政権に対す
る米国の懐疑的態度が時に表明される
のはこのような点が背景にあると思い
ます。

日本の世論調査では、多くの国民が
いぜんとして現憲法を支持しており、
9条は基本的に維持されるべきである
と思います。安倍首相の改憲思想の出
発点には、以上述べた不戦条約から国
連憲章の成立、そして我が国の新憲法
成立に至る歴史的視野がすっぱり欠落
しており、その後、国民の全ての努力
によって築かれた平和主義で貫かれた
戦後レジームを否定し、戦前レジーム

への回帰を目指していると疑わざるを得ないのです。ここには戦争に負けた日本の平和に対する責任と戦後の平和構築の努力を感じ取ることができないのです。

新憲法発布後の日本の学校教育で繰り返し教師から学んだ日本国憲法の真髓によって育ったわれわれは、戦後の約70年間、この日本の平和主義に本当に誇りと信念を持つようになっておりました。戦争被害を与えたアジア諸国との新たな友好関係の構築に対する日本国民のたゆまぬ努力によって、これらの諸国からの厚い信頼が目に見える形で形成され、われわれに自信を与えてきたことを実感していました。

(3) 集団的自衛権の問題点と新安保法

制の危険性

60年あまり続いた冷戦時代の核競争の結果たどり着いた核抑止論に基づく

核兵器国間の戦争予防政策は、まさに武力による平和維持と行うことができます。一方、我が国が新憲法の下、最近まで歴代内閣も貫いてきた最小限の自衛権に依存し、専守防衛に努めて平和を維持してきたように、これからもこの平和主義を維持したいと考えるわれわれの世代の考えと、安倍政首相が常々強調する積極平和主義の考えの間には、根本的な対立が生じておりません。以下にその問題点の本質を明らかにして、集団的自衛権の行使を実際に目指す政策を日本がとった場合、近隣アジア諸国とのこれまでの友好関係を傷つけ、米国という同盟国にのみ依存する外交では将来かならず日本は禍根を生じることを陳述したいと思いません。

集団的自衛権を求める動きは、米国の安保条約を基盤とする同盟関係から、構造的に、今後の米国の世界的軍

事政策（米軍再編）に無条件で協働し、追隨する道を開くこととなります。自衛隊を国防軍とする憲法的位置づけを目指す自民党案と政府の要求から、集団的自衛権にこだわりつづける議論が延々と続けられてきました。米国と是非々々で同盟関係を保ち、世界情勢を見極めつつ、日本の平和維持のためには、専守防衛がもっとも適切であり、安易な集団的自衛権の行使には慎重さが求められるのです。特に米国の現政権のような不安定な政権の外交・軍事政策にむやみに追隨することは、いかに同盟国であっても慎重でなければなりません。

4 日本の戦後の平和外交と

アジア諸国との信頼醸成

日本と中国、北朝鮮、さらには韓国とも将来的に平和構築をしていくことこそ、日本にとって最も重要な課題で

あり、やるべきことは平和外交の継続であります。これには対話による信頼醸成が基本となります。いたずらに集団的自衛権を主張、行使することは、戦後73年の長きにわたって築いてきたアジア諸国との信頼関係を危ういものにするといわざるを得ません。日本の憲法改正の動き、特に集団的自衛権の確立の動きは現在多くのアジア諸国の不安と懐疑を引き起こしつつあります。日本の戦後の伝統の平和主義外交が、積極平和主義という説明に置き換えられて、曖昧化されています。このような定義の曖昧な用語の使用は安倍政権の特性と見なされます。

5 日本の未来の方向性を決める

憲法違反の政府独断

核兵器廃絶という日本国民が希求する政策とは真反対の安倍政権の取り組みは、核兵器禁止条約への参加を真正

面から否定しており、核なき世界への希求が続いている広島・長崎のヒバクシャと日本の国民を裏切るものであります。集団的自衛権の閣議決定には、この「米国の核の傘」依存政策に相通じる部分があり、きわめて遺憾であり、政府の個別的自衛権と集団的自衛権の定義の差異の説明も不完全であり、国民が十分理解したとは言えないまま、新安保法制は国会で強行決議されております。

実際、全く前のめりの法案審議でありました。拙速でした。国民の意見を聞くことを避け続けたことは明らかです。これは立憲民主主義の根幹を破壊しました。多くの憲法学者が違憲の判断を表明したことは当然でありました。集団的自衛権の行使なくしては超えられない事態（重要事態法案の内容）は、今の日本を取り巻く国際情勢のなかで何であるかについても、具体的には政

府によって説明されておらず、必然的に国民はこの問題について理解することはできず、国民の意見を広く徴したとはとても言えませんでした。同盟国である米国の要望と圧力に屈した観があり、国民は本当に不安であり、怒りの感情さえ湧いてまいります。

現在の米国は、日本のこのような憲法解釈を変更する姿勢を歓迎しているように見えます。しかし日本が、もしも国防軍を正式に創り、集団的自衛権を行使し始めた暁には、米国自身が日本の戦前レジーム復活に道を拓いたことに対して、手を焼く事態が出てくることも想像されます。米国が安倍政権成立初期に示した安倍首相の靖国参拝の意思への強烈な反発はなぜ生じたかここで、十分に考察する必要があります。日本の軍事強国化という安倍首相の腹案に対しての米国支配層の懸念は、戦前の日米対立の再現を危惧するもの

であり、日本の核保有の意志に対して
も深い疑念を持つ米国民もいるほどな
のです。

6 不戦の思想を欠如した日本の

対応…米国の軍事再編への共同
体制構築としての集団的自衛権
の確立

先に説明したように、現代は、戦争
を否定する国連憲章を、日本を含め加
盟国全員が認めている時代であります。
国同士の戦争の生起を前提とするよう
な安保法制の議論は、歴史的な人類の
進歩を見誤っています。国際紛争は個
別的自衛権の行使で対応可能であるこ
とがほとんどあります。さらには、こ
れに日本自身の外交力と国連の枠組み
を併用して対処して行けば、多くのこ
とは解決できると思います。このよう
にして現に大国同士の戦争は防止され
ており、また核戦争の勃発も、2度と

核兵器を使用しないという広島・長崎
の原爆体験が世界の規範にまでなっ
てきて、2017年には核兵器禁止条約
も成立しており、批准され、発効が近
い将来見込まれています。世界はより
安全になってきつつあるのです。安倍
政権には国民の北朝鮮への不安や韓国
への不信をおおるようなところが見受
けられ、危険な瀬戸際外交といわざる
をえません。

もちろん核兵器のない世界を目指す
上では、いくつもの重要課題が世界に
は山積しています。さしずめ北朝鮮の
核兵器放棄の課題が日本を含むアジア
では重要であります。ロシアとNAT
O諸国間の核兵器対立はI N F（中距
離核兵器全廃）条約の崩壊を現に生じ
つつあります。インド・パキスタン間
の核兵器対立も依然として深刻であり
ます。さらに大きな問題はイスラエル
の核兵器保有とイランをはじめとする

アラブ諸国の核兵器保有指向の大問題、
等々が山積しています。これらはすべ
て、対話と信頼醸成肉話目国連の枠組
みで対処して、解決すべき課題です。

現に昨年は米朝首脳会談が2回もた
れ、まだ結論を得るには至っていませ
んが、朝鮮半島の平和と非核化のプロ
セスは対話と信頼醸成を基軸にして動
き始めているのです。日本はこの面
でも対応が遅れています。集団的自衛権
による積極平和主義一本槍では柔軟性
を欠いた外交と言わざるを得ません。

7 日本の安全保障を危うくする

戦争（実戦）可能態勢

日本の安全保障については、これら
の核兵器を巻き込んだ国際問題に比べ
れば、我が国固有の問題に過ぎず、い
たずらに集団的安全保障の重要性をこ
とさらに北朝鮮危機や、中国との領土
問題を用いて、あげつらいすぎており、

大局的には憲法の解釈を変えてまで日本の安全保障政策を見直す必要はないというべきです。戦争の危険はそのままで膨らんだ状態ではないのです。日本が方向転換して、平和主義に回帰すれば、平和構築はもっとたやすく言えます。安倍内閣の問題提起は、常に大げさに提案して国民の賛同が得にくいと分かると、矮小化して再提案するということの繰り返しになっています。その意味で市民社会は安倍政権に大きな影響を現に与えて来たとも言えます。したがって安倍政権の政策は、日本の将来の平和と世界の安全保障の現状を見すえたいうでの大局的な見地からのものとはとても言えません。国民の多くは大きな不安を抱いているのが事実です。

8 積極平和主義の行き着く先

武力による平和維持は、武力増強に

関する歯止めのない中では、必ず軍拡に繋がります。現に日本と中国の間にはすでにそれが生じており、危険です。北朝鮮の脅威を理由に政府が進めているイージスアシヨア（陸上型ミサイル防衛システム）の設置計画も、米朝對話の開始と進展により朝鮮半島の平和と非核化の交渉が始まり、脅威は軽減されつつあるにもかかわらず、この軍備拡張の計画はいつこうに中断あるいは中止がなされません。外交努力による平和維持と最小限の自己防衛を可能とする軍備による平和維持のバランスを、日本は巧みにとって行くべきであります。この観点から今はまさに日本国憲法の真髓が発揮されなければならぬ時期なのです。

同盟国の紛争で日本の自衛隊が派兵されることが実際に起こった場合、それがどこまで日本の存立を危くするか、これは国民にとって理解のできる

課題となっているとはとても言いえないのが現状であります。この派兵によって敵国（戦後はじめてこの用語が使われるでしょう）の兵士を殺傷し、しかも我が自衛隊員にも戦死者が出ることは、これまでの米軍の様々な国際紛争における戦死者の数の多さを知るものにとつて、まさに必然であります。安倍首相の「そういう事態はまずありません」という安直な説明には啞然とするのみならず、自衛隊員の総帥である首相としての心構えのひ弱さにもため息が出ます。積極平和主義には戦死者も出るという意味が当然含まれ、その犠牲によって平和をあがなう思想が基本となるはずはです。積極平和主義についての政府の国会答弁は、これは抑止力であつて実際には戦闘を予防するためである、という説明であつたと思うが、本当にそうでしょうか？ 米国の軍事行動は常に戦闘を伴っているで

はないか？戦死の覚悟で出兵した自衛隊員も、自らの死で平和があがなわれることを覚悟しつつ出動するのではないのか？われわれの父の世代が先の大戦時に出征するときには、一族がそろって日本の平和、家族の無事を祈念して、送り出していたのである。そして何人もの親族が帰って来ませんでした。

9 新安保法制成立によって受け た私自身の打撃

われわれの父親世代が戦った第二次世界大戦は、われわれ戦後世代にも大きな影響を与えました。敗戦による連合軍の占領統治を経て、新日本国憲法が成立し、平和国家建設を目指す戦後が始まりました。われわれの小学校時代には、教師が熱心に平和憲法を力説する姿が、いまでも脳裏に浮かびます。戦地から帰還して新しい日本の建設に

邁進する父の世代の人びとが、この当時の負からの再出発にも関わらず、一様に皆明るい表情で働いており、貧しいながらも希望にあふれていた様に感じていました。好ましい日常風景として記憶に鮮明です。このような教育と環境によって育った、あたらしい国民として、父親世代が戦った誤った侵略戦争を反省する気持ちから、新たなアジア諸国（およびその国民）との交流が課題となつて、たゆまぬ努力が国民レベルで行われていました。これによって、いわゆる平和国家の実績が築かれていったのが、まさにわれわれの世代でした。

その世代に所属する者にとって、特に原爆の洗礼を受けたわれわれヒバクシャにとっては、今回の集団的自衛権に基づく新安保法制の成立は、自分自身につけた日本人としてのアイデンティティーを根底から覆されるような大

打撃であったことを強調したいと思います。また現在の日本の北朝鮮、韓国、中国との平和的交流の基盤が崩壊していく様を目の当たりにしています。この悲しい現実と不安感、そして将来の日本の平和に確信を持てなくなりつつある国民としての自信喪失感、などがない交ぜになって、ここ数年、個人のそして多くの国民の精神的不安定性が生まれつつあると感じます。

祖国日本の戦争での敗戦と原爆の後遺症という負の体験から出発点にした私の場合は、戦後の日本の平和国家のイメージの確立は、アジア諸国の医師たち、特に韓国、中国の医師たちとの協同研究などにおいても、個人レベルの外交の場において、大きな自信を与えてくれました。これがもろくも崩壊しつつある今の日本に、絶望感を禁じ得ません。これは国際的にも活動してきた自らのキャリアーに、虚無感

という危険な側面が生じつつあることを

を告白せざるを得ません。日本を捨て

てどこかよその国に亡命するか？とい

うような密かな感情の芽生えを感じる

ことが時々あるのです。ヒバクシャと

して核廃絶運動に身を投じてきた、半

世紀を超える活動基盤ががらがらと崩

れる感じがいたします。この無念の気

持ちを他の国民に分かつていただくの

は困難かもしれません。原爆を投下し

た米国に対して、その非人道的な行為

に対して恨みの一つも言えない中、ひ

たすらに他の人類が再び核兵器の攻撃

で同じ目に会うことは絶対に許さない

ぞという気持ちに支えられてきたヒバ

クシャの生涯は、ここに来て、核の傘

と集団的自衛権によって、またせつ

かっく成立した核兵器禁止条約にも加

盟を拒否する日本政府、核抑止と積極

的平和主義にとって代わられる日本の

今後の安全保障の激変には正直耐えら

れないのです。

10 ヒバクシャが新安保法案成立 で受けた衝撃

すでに述べたように強烈な打撃に見 舞われた国民は、今なんとかこの法案 の撤廃策がないものか思案に暮れてい ます。裁判だけが頼りであります。し かし違憲審判の壁は厚いと聞きます。 政府の安全保障政策マター (Matter) には裁判所が判断を避けることがこれ までには多かつたからであります。こ のためにこれまでのたびたびの違憲訴 訟と言われる裁判は、実際には法案に よって人権侵害を受けているかどうか が重点的に争われている傾向がありま す。このために多くの人がびとが、自ら が被った、法案から受けた精神的打撃 を陳述しておられます。私も同様であ ります。

ヒバクシャにとってはそれにも増し

て、戦後の苦難のヒバクシャとしての

人生の再生を必死で営み、二度と原爆

の惨害を他の人間、すなわち人類に味

合わせたくないという必死の思いで戦

後70年を必死に生き抜いてきた自信と

自負が、すなわちヒバクシャ・アイデ

ンテイティーが、根底から崩れていく

思いに至っている状況を法案はもたら

しているのです。この一点は多くの戦

争体験者とヒバクシャに共通している

心情でもあります。この国は戦争の犠

牲者に対するお詫びと戦後復興の努力

への深謝の気持ちを伝える前に、専守

防衛と平和主義をかなぐり捨てようと

していると言わざるを得ません。

世論調査では過半数の国民が同法案

に反対しているにもかかわらず、与党

自民党の数の力によって法案は易々と

通過してしまう。このような悲しみと

無力さを何度も味あわされたのであり

ます。憲法の番人とも言うべき法制局

の長官のいとも簡単な首のすげ替え、集团的自衛権の閣議決定、ほとんどの憲法学者が違憲とするその決定の強行、不十分な法案審議の末の強行採決と、立憲主義に基盤をおく日本の戦後の国体は死に瀕しているのです。

11 個別的自衛権による専守防衛 でアジアの平和を築くこと そ日本の安全保障の道

政府は今、国民の生命の安全、財産の保全にとって武力は不可欠と説明し、集团的安全保障政策による積極平和主義こそが日本に平和をもたらす、とさかんに力説しています。今もなお多くの課題を抱える韓国、北朝鮮、中国との外交関係を見ても、集团的自衛権によって力による戦争抑止でこれらの国との将来の平和構築が実際に可能となるでしょうか？否です。礼節を重んじる対話こそが、これからの信頼醸成に

必須であり、武力は自衛の範囲でのみ使用することが望ましいのです。積極的平和主義によって出兵するような事態になれば、今の平和を維持できるところか、崩壊するでしょう。米国が世界の各地で紛争解決に苦悩している様子をみるにつけ、武力による平和ほど危ういものはないと思うのです。将来にほつもこのように解決不能の苦しみを味わうでしょう。

核廃絶がなかなか進まないのも同じ理由です。核兵器が平和維持に必須となれば、永遠に核兵器の廃絶は実現しないのであります。人類が核なき世界を真に望むならば、どこかの時点で核兵器の全廃を決意しなければならいのです。今その最大のチャンスが核禁条約の成立で訪れています。核兵器国と日本などの核抑止依存国は見向きもしない状況は、医師の目から見ると、まさに地球規模の狂気という疫病に冒

されているようにしか見えません。積極平和主義もこれも捨てる覚悟を決めなければ、永遠の軍備拡張を続ける日本の将来が目に見えます。最後に、新安保法制の廃止を裁判所の力で実現していただくようお願い申し上げます。陳述を終わります。

略歴

- 長崎大学名誉教授、日本赤十字社長崎原爆病院名誉院長 朝長万左男
- 昭和18年6月5日 長崎市生
- 昭和43年3月 長崎大学医学部医学科卒業
- 同年 4月 長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設内科入局
- 45年4月 長崎市立市民病院内科
- 45年9月 原爆傷害調査委員会（A B C C）研究員
- 47年4月 原研内科 助手
- 48年4月 聖フランシスコ病院内科
- 50年5月 原研内科 助手
- 52年4月 原研内科 講師
- 59年11月 文部省在外研究員（カリフォルニア大学ロスアンゼルス校血液腫瘍内科）
- 61年10月 原研内科 助教授
- 平成2年10月 原研内科 教授
- 11年4月 長崎大学医学部附属病院副院長
- 13年4月 長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設長
- （平成14年4月 長崎大学大学院医療薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設へ改編）

18年4月 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
長

21年3月 長崎大学定年退職

21年4月 日本赤十字社長崎原爆病院院長就任

26年4月 同上退職 名誉院長授与

【主要学会】

日本内科学会（評議員）、日本血液学会（理事）、日本臨床血液学会（代表幹事）、日本網内系学会（評議員）、日本検査血液学会（評議員）、日本癌学会、日本癌治療学会（臨床腫瘍データベース委員会専門委員）、日本臨床腫瘍学会（評議員）、国際血液学会、国際実験血液学会、米国血液学会（ASH）、米国臨床腫瘍学会（ASCO）

【主要学術活動】

平成15年度 日本臨床血液学会会長

Japan Adult Leukemia Study Group (JALSG)運営委員
副委員長（1987-2009年）

悪性リンパ腫研究グループ（Lymphoma Study Group (LSG)）班員：成人T細胞白血病（ATL）研究代表者

厚生省補助成金：白血病班長（平成19～20年度）

厚生省特定疾患／特発性造血障害調査分科会 班員

（再生不良性貧血・MDS担当）

第8回国際MDSシンポジウム（Nagasaki 2005）
会長

原子力安全委員会 専門委員（1995～2005）

【専門領域】

白血病、成人T細胞白血病、悪性リンパ腫、骨髄異形成症候群、再生不良性貧血、放射線後障害、実験血液学、細胞化学、分子細胞生物学

【社会活動、その他】

核戦争防止国際医師会議（IPPNW）

国際国際副会長（2010～）

長崎平和推進協会副理事長（2002～2015）

核廃絶ナガサキ市民集会実行委員長

（2008～2019）

外務省「核軍縮の進展のための賢人会」メンバー

（2017～2019）

朝長万左男 論文リスト

J Clin Oncol. 2011 Feb 1;29(4):428-34.doi:10.1200/JCO.2010.31.3080.Epub 2010 Dec 13.
Risk of myelodysplastic syndromes in people exposed to ionizing radiation: a retrospective cohort study of Nagasaki atomic bomb survivors.

Iwanaga M¹, Hsu WL, Soda M, Takasaki Y, Tawara M, Joh T, Amenomori T, Yamamura M, Yoshida Y, Koba T, Miyazaki Y, Matsuo T, Preston DL, Suyama A, Kodama K, Tomonaga M.

Jpn J Clin Oncol. 1988 Jun;18(2):91-6.

Reclassification of leukemia among A-bomb survivors in Nagasaki using French-American-British (FAB) classification for acute leukemia.

Matsuo T¹, Tomonaga M, Bennett JM, Kuriyama K, Imanaka F, Kuramoto A, Kamada N, Ichimaru M, Finch SC, Pisciotta AV, et al.

J Radiat Res. 1995 Mar;36(1):8-16.

Atomic bomb and leukemia.

Ichimaru M¹, Tomonaga M, Amenomori T, Matsuo T.

J Radiat Res. 1991 Dec;32 Suppl 2:14-9.

Anti-Human T-lymphotropic virus type-I antibodies in atomic-bomb survivors.

Matsuo T¹, Nakashima E, Carter RL, Neriishi K, Mabuchi K, Akiyama M, Shimaoka K, Kinoshita K, Tomonaga M, Ichimaru M.

Radiat Res. 1994 Feb;137(2 Suppl):S68-97.

Cancer incidence in atomic bomb survivors. Part III. Leukemia, lymphoma and multiple myeloma, 1950-1987.

Preston DL¹, Kusumi S, Tomonaga M, Izumi S, Ron E, Kuramoto A, Kamada N, Dohy H, Matsuo T, Matsui T [corrected to Matsuo T], et al.

Leuk Res. 2001 Jan;25(1):33-38.

De novo acute myeloid leukemia in the elderly; a consistent fraction of long-term survivors by standard-dose chemotherapy.

Yoshida S¹, Kuriyama K, Miyazaki Y, Taguchi J, Fukushima T, Honda M, Hayashibara T, Nagai K, Atogami S, Toriya K, Soda H, Nonaka H, Momita S, Jinnai I, Amenomori T, Kusano M, Yoshida Y, Ikedo S, Matsuo T, Tomonaga M.

Leukemia. 2007 Jun;21(6):1212-7.Epub 2007 Apr 5.

Small number of HTLV-1-positive cells frequently remains during complete remission after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation that are heterogeneous in origin among cases with adult T-cell leukemia/lymphoma.

Yamasaki R¹, Miyazaki Y, Moriuchi Y, Tsutsumi C, Fukushima T, Yoshida S, Taguchi J, Inoue Y, Matsuo E, Imaizumi Y, Imanishi D, Fujimoto T, Tsushima H, Honda S, Hata T, Tsukasaki K, Tomonaga M.

Clin Lymphoma Myeloma Leuk. 2014 Feb;14(1):18-20.doi:

10.1016/j.cml.2013.12.010.Epub 2013 Dec 19.

Prevalence of monoclonal gammopathy of undetermined significance in Asia: a viewpoint from nagasaki atomic bomb survivors.

Iwanaga M¹, Tomonaga M².

Radiat Res. 2013 Mar;179(3):361-82.doi:10.1667/RR 2892.1.Epub 2013 Feb 11.

The incidence of leukemia, lymphoma and multiple myeloma among atomic bomb survivors: 1950-2001.

Hsu WL¹, Preston DL, Soda M, Sugiyama H, Funamoto S, Kodama K, Kimura A, Kamada N, Dohy H, Tomonaga M, Iwanaga M, Miyazaki Y, Cullings HM, Suyama A, Ozasa K, Shore RE, Mabuchi K.

Mayo Clin Proc. 2007 Dec;82(12):1474-9.

Prevalence of monoclonal gammopathy of undetermined significance: study of 52,802 persons in Nagasaki City, Japan.

Iwanaga M¹, Tagawa M, Tsukasaki K, Kamihira S, Tomonaga M.

Blood.1985 Aug;66(2):350-7

Cytochemistry of acute promyelocytic leukemia (M 3):leukemic promyelocytes exhibit heterogeneous patterns in cellular differentiation.

Tomonaga M, Yoshida Y, Tagawa M, Jinnai I, Kuriyama K, Amenomori T, Yoshioka A, Matsuo T, Nonaka H, Ichimaru M.

Blood. 2011 Feb 1;29(4):428-34.doi:1



子どもたちにも語り伝えたいこと

長濱 キミ子

川平小学校の皆さん、こんにちは、元氣そうですね。今日は川平小学校の元氣な皆さんにお会いする事ができ、本当に嬉しく思っております。なぜかと申しますと、私も13年前までは、この川平小学校に、庁務員として40年余り勤めていたからです。

教頭先生より私のところに電話がありました、原子爆弾当時の体験談を川平小学校の皆さんにお話ししてくださいとお話がありました。

最初私は、人様にお話しはできません、とお断りしましたが、「この話は原子爆弾を受けた人にだけしか話す事

はできないのだ。」と思いましたが、皆さんにお話しする事を引き受けました。そして、私の話が、皆さんに一つでも二つでも分かって、そうだったのかと思ひ、心にとめていただきましたら私はとても幸せです。

私が皆さんにお話をするという事で、一つ一番気にしたことがあります。それは何かと申しますと、1年生の皆さんから6年生の皆さんまで一緒に話を聞いていただくということです。5、6年生のお兄さんお姉さんには分かってもらえても、1、2年生の皆さんには「無理ではないのかな」と、いろいろ

ろ考えました。分かり易くやさしく言うとして、2年生の皆さんには分かってもらえるけども、5、6年生の皆さんには少しやさしいと思うところもあるでしょう。どうしようかと迷いましたが、今日は低学年の皆さんに合わせて、話をする事にしました。そして、一つでも皆さんに多くお話を伝えたいと思ひ、ノートに書いてきました。年を取りますと、今思っている事でもすぐに忘れたり、言葉に出てこない時があります。

私たちは去年11月末に何年振りかの西浦上国民学校の同窓会をしました。

原子爆弾で亡くなられた先生方や同級生、その後亡くなられた同級生の方々
に黙祷をし、冥福をお祈りして同窓会
が始まりました。その中で原子爆弾の
時の事は話すまい、思い出したくもな
いから、という事で誰一人として話す
人はいませんでした。私もそのうちの
一人です。

でも今、私たち年をとった被爆者が
話さないと、戦争の恐ろしさやこわさ、
そして戦争のない平和の有難さが分か
らないのではないかと思っています。
幸い、私たちが住んでいる日本の国は、
「戦争をしない」という国のさまりの
もとで、戦争のない平和な毎日を通じ
て、戦事が出ておらずね。今、その国
の決まりが壊されようとしています。
恐ろしい事ですね。

長崎でも昨年11月3日に、国のさま
りを守る会（憲法9条を守る会）がで
きまして、会長さんに長崎大学の元学

長であられた土山先生がなられ、初め
ての会合が家野町の長崎大学中部講堂
でありました。一般市民の方はもとよ
り大学生などの若い人から、そしてお
年をとられた方々まで幅広く集って
おられて、私も出席してよかったですと実感
して帰った一人でした。

今、平和だから欲しい物が何でも手
に入り、お金さえ出すと品物がありま
すよね。でも今、世界中のどこかで戦
争があつています。それがテレビで映
し出される場面を目にします。子ども
たちが戦争のために食べる物もなく、
やせて逃げ回る姿を見る時、どんな気
持ちになりますか？戦争があると戦争
に関係のある兵隊さんばかりでなく、
一般市民や子どもたちまで必死に逃げ
回らなければなりませんね。

私たちがいま住んでいる日本の国も
60年前は丁度テレビ等で観るように、
敵の飛行機が来ると防空壕に逃げこみ、

隠れ、敵の飛行機が来ないときに仕事
をしていました。いつ何時に敵の飛行
機が、自分たちが住んでいる所に来る
かわかりません。戦争がひどくなると
夜でも眠れませんね。電気も真っ暗に
して生活をします。何故かという、
明るくしていたら、人間がいることが
敵の飛行機にわかり、爆弾を落とされ
ます。

平和な時は今のように何でも品物が
沢山あります。欲しい物がすぐ手に入
ります。戦争が始まると、すぐに何で
もなくなくなります。食べ物から、着る物、
靴、下駄、学校で使うノート、学習に
使う半紙、折り紙に至るまでなくなり
ます。どうしてでしょうか？「誰かが
隠してしまうのでしょうか？」皆さん
は、戦争が始まると、なぜ品物がなく
なると思いますか？

私たちは学校から帰ると、農家です
のですぐ畑に行き、一生懸命に働いて

頑張っているのに、食べるものもない。不思議ですね。そうです、戦争がある。と私たちはその戦争に勝たねばなりません。勝つために兵隊さんが使う「飛行機や船、戦車や爆弾など」戦争に使う品物を沢山作ります。農家は自分の家で作った米や麦、芋類を国に出さなければならぬのです。（これを供出といいます）

農家がついている田や畑を見回って、これだけの面積があるのでこれだけの量は出さないと命令されます。割り当てが来て、それを出さなければならぬので、自分たちの家で自分たち親子で作っても、自由になりません。自分で売ることもできないのですよ。それから、だんだん戦争がひどくなり、長崎の空にも敵の飛行機が毎日のように来て、空襲警報が頻繁に出されるようになりました。

今は平和ですので、学校も土曜日、

日曜日と休みますね。会社でも土曜日と日曜日に休むところが多くなってきました。当時、戦争の時は土曜日も日曜日も全くありません。1週間が、「月・月・火・水・木・金・金」でした。戦争のため休みなく働き続けたのです。

私が通っていた学校は、「西浦上国民学校」です。現在附属中学校が建っている場所です。国民学校は初等科と高等科に分かれていて、初等科が6年生まで、高等科が2年間でした。いままなら、中学2年生ですね。

戦争も日増しにひどくなり、空襲警報が毎日のように出されるので、初等科の6年生までは別々の地域で分かれての授業になり、（分散授業）各地区にある神社や供出荷場に集まり、先生が時々廻ってこられて授業をしました。しかし地区が多かったので、先生が来られない日は自分たちで自習をし

ていたようです。

高等科は、夏休みでも休みはなく、学校へ行って何をしたかと言いますと高等科の男子生徒は、学徒動員で西浦上国民学校の横にあった兵器工場に毎日通っていました。

女子は、食糧増産という農作業です。西浦上国民学校は田んぼを沢山作っていました。今の浦上水源地の先の「人野」という所と赤迫の六地藏の所にも広い田んぼが何枚もありました。畑は住吉の向こう、線路を越えて西北という所にあり、さつまいもを作っていました。作物の手入れの暇の時は、運動場を耕していました。運動場までもだんだんと畑に変わっていきます。

戦争中は食べる物から、着る物、紙類、筆、ペンに至るまで不足して靴などもなく、家で米を収穫したあとの「わら」で作ってもらったわらぞうりです。それが水に弱く雨が降るとぞうりはす

ぐに切れるので、雨が降ったりするとぞうりは脱いで手に持って帰りました。

着る物はどんなにしましたか、と言いますと、母親が持っていた手織りの着物をつぶして、それで上着とモンペーと頭巾、頭巾は頭に傷を負わないように、綿を入れて母親が縫ってくれました。そしてこの上着と頭巾には住所、保護者氏名、本人氏名、年齢と血液型を書いた名札を縫い付けてもらい、それを着ていました。

今は道路も舗装されてきれいな道路ですが、昔は小石だらけなのでこぼ道でした。幸いなことに自動車は1台も通ったことはありません。リヤカーと荷車だけです。荷車を牛に引かせて通っていました。

私たちは、戦争がひどくなっても、戦争には勝つものと信じていました。なぜかと申しますと、「日本の国は『神の国』である。最後は神風が吹いて戦

争には勝つ。」と教え聞かされていま

した。それから、毎日私たちが言っていた言葉がありました。1つ目は「海

行かば水漬く屍 山行かば草生す屍

大君の辺にこそ死なめ かへりみはせじ」で2つ目は「一億一心 われここに有り」3つ目は「欲しがりません勝

つまでは」です。どんな事かと言いますと、1番目は「戦いで海に行くなら、

水に漬(つ)かる屍(しかばね)となりましょう。戦いで山に行くなら、草

の生える屍となりましょう。天皇のお

側(そば)で死ぬのなら、決して後悔はしません。」と言うことです。2つ

目は、その時人口が1億いたそうです。2つ目は、「一億の人が一つの心になり戦

争に勝ち抜くのだ、その自分はこのこ

おります。」とのことです。3番目の

言葉は、「戦争に勝つためには何もいりません。何も欲しくありません」と

いうことです。学校へ行ったら、毎日

この言葉を言ってから仕事にかかります。

昭和20年8月9日、その日も朝から

空襲警報になりましたが、9時前に警

戒警報にvari(空襲警報の時は学校に行かない)それから同級生5名と学校

へ行き、学校に着いたのは10時前後で

はなかつたろうかと思っています。今は、道路の位置がかわったところもあり、距離が近くなっておりますが、そ

の当時は、川のそばが道路で曲がりくねっていました。家から学校までは片

道50分ぐらいかかったと思っています。

たまに、空襲警報の関係で、午前中

と午後と2回行った事もありました。

幸いなことに、私の家の隣組の「谷口キクさん」と言われる方が、西浦上国

民学校の「用務員さん」で、よく「キ

イ姉ちゃん、キイ姉ちゃん」と言っていて、昼休みなど「川平組」は

用務員室に入りをさせていた

いました。

学校に届いてしばらくしたら、先生が教室に見えられました。私たちの先生は、田中先生とおっしゃいましたが、先生になられて1年目という、とても若い女の先生です。

「今日は空襲警報が終わるとすぐに学校に来てくれましたが、あなたたちはすぐに帰りなさい。仕事も何もしなくていいです。すぐに帰りなさい」といわれたのでびっくりしました。

早く帰るように言われたので、すぐ教室を出て「おかしいね。空襲警報でもないのに」といいながら用務員室に行きました。谷口さんをお願いして、午後、又教室に行くまで居させてもらうことにしました。

「今日の田中先生はおかしかよ、空襲警報でもないのに」そんなことをいろいろ話していたら、田中先生が用務員室にみえられ、又「すぐ帰りなさい」

と言われたので、返事だけ「はい」と言つて、先生が又職員室の方に行かれると、又私たちは座り込みます。

しばらくして又、私たちが帰つたかを見に田中先生が来られて「まだ居る、早く帰りなさい。」と言われたので、「午後、又学校に来るのがいやで、午後教室に行くまでここにおいてもらいます」というと、田中先生は「今日は午後も学校に来なくていいですので、すぐに帰りなさい」と言つて、又職員室の方へ行かれたので、「どうしよう、昼から来なくてよいなら帰ってもよかね」「でも、今日の田中先生はおかしい」と言いながら、用務員室を出て帰ろうとします。

今度はすぐに又、田中先生が見えられて「早く帰りなさい。あなたたちが帰るまで先生はここにいます。」と少し強い口調で言われたので、私たちは、用務員室を出ました。学校の回りは田

んぼばかりで、田に水を入れる溝があり、いつもきれいな水が流れていて、手などそこでよく洗っていました。その時は、用務員室から先生が見ておられるので、手洗いもせず早く通り抜けました。私たちは田中先生に学校を追い出されたと言いますか、見送られたと言いますかわかりません。

その辺の店屋さんというと、学校前の文具屋さんと大井手の山田商店、その下隣の原口商店です。その日、私は配給の醤油を買うことになっていて、配給の券を持って原口商店で醤油一升を買つて、山田商店の前には「大きな大きなせんだんの木三本」もあります。とても暑い日でしたので、木陰に立つて間もなく、少し赤みが入った黄色いものすごい光を見ました。

そのあと何が起きたかわかりません。何かが起こつたと思ひ、辺りを見回すことなく、山田商店の前は一面田んぼ

でしたので、近道を行って、学校帰りは田の畦道をよく通っていました。

その畦道をどんなにして走って通り抜けたかわかりません。今の川平入口バス停下の、墓があるところなど山が覆い被さり、昼間でもとても寂しい所でした。川平に入りまして最初にある家が、今の下川平バス停の所になりました。その家に火がつき火事になって、家の中ではおじいちゃんとお母さんが荷物を一生懸命、庭に投げ出しておられました。

普通の家の火事というのは、台所などから火が出ますが、原子爆弾の火事は家の一番高いところ（棟）に火がついて外から燃えていきます。その家も一番高いところから燃えて、中ではまだ荷物を投げ出しておられました。

周りは山の近くに家はありますが、その時は辺りを見回す余裕はありません。周りは田んぼばかりです。私たち

は火の粉が飛んでこないように、川に降りて川の淵の草にすがったり、川の中に入って歩いたりして、なかなか進みません。

三川橋の少し先まで来ると、道のそばに又一軒あって、そこのおじさんが私たちが川を歩いているのに気付いて、「そんなにしてあんたたちは帰られん、あぶなかばい。自分所の防空壕に行つて様子を見て、夕方、飛行機の来んようなとき、かいらんね」と言われ、そのおじさんが私を見て「あんたは何んばしたとね、前中服でも何でも黒くしてしまつて」と言われて、初めて醤油を買ったのに気が付きました。飛ばされた時に醤油の瓶が割れたのですね。その割れた瓶が入った手提げ袋を持って走つたりしたのに、誰一人として、私たちの仲間は私の服が黒くなっているのにも気付かずに、自分のことで一生懸命で恐ろしさと怖さで体がガタ

ガタ震えていました。

割れた瓶が入った手提げ袋をその家において、裏の畑の横にある防空壕にいられたいただきました。防空壕でも体の震えはなかなか止まりませんでした。時々、飛行機の音がすると身が縮む思いがします。又、そのあたりに爆弾を落とされるのではと心配しました。飛行機の音が少なくなったので防空壕の外を見ると、畑の里芋の葉には黒い油雨が降っていました。

家のことも心配なので、みんな帰ることにしました。我が家までは急いでも30分近くかかります。筒水まで来ると向かいの山の近くにある「松本」の叔母の家（父親の妹）が焼けてしまっていました。筒水を通り過ぎて「今のガソリンスタンド」がある隣に一軒家がありました。全部焼けてしまつて、家族の人は田の畦に腰掛けておられ、家の道具も全然出してない感じでした。

た。

急いで家に帰ってみると私の家は傾き、中はすすだらけで足の踏み場もない様子でした。家では私が帰って来ないので、探しに出ようと言っているところのようでした。私も家に着くと急に具合が悪くなり、何と言ってよいのか、どこが痛いという事ではなく吐き気がして気分が悪いのです。母親がお茶は毒消しだからといって、お茶を濃くして飲ませてくれたのを今も忘れません。その頃は薬も不足していたので、「げんのしょうこ」とか「医者殺し」という草など煎じて飲んで治していたのですね。

そうそう、私たちの田中先生はどうなられたのでしょうか。西浦上国民学校は焼けたのではなく、ペっちゃんに倒れてしまったのです。田中先生も他の4名の先生も、校舎の下敷きとなって亡くなられました。田中先生は大きな柱の下敷きになって「助けてください。誰か助けてください。」と叫んでおられたそうですが、すぐに柱を切つてのける鋸などもなく、5時間後に助け出された時は、力が尽きて亡くなられたそうです。(谷口さんの話) 私たちの身代わりになり、私たちを学校から追い出して先生が亡くなられたので、私は一生田中先生を忘れることは出来ません。

用務員の谷口さんと言いますと、けがだけで済みましたが、その後病気になる、又ガンになって入院したり退院したりを繰り返して、今も立山町に住んでおられます。

原爆でその日に亡くなられた方が、このちいさな川平町だけでもだいぶおられます。私の家の隣組でも9軒しかありませんでしたが、2人亡くなられました。2名の人を隣組で探しに行きましたが、死体も見つかりませんでした。

川平の同級生で学徒動員で亡くなられた方は、川平で1人、六枚板で1人でしたが、西浦上国民学校の同級生を入れると多い人数になります。

長崎では原子爆弾で8月9日の1日だけで、どれ位亡くなられたと思えますか? 「水が欲しい。水が欲しい。」と言って浦上川(大橋の下辺り)に行つて水を飲むと、もうそこで折り重なつて川岸で死んで行かれたそうです。水にも毒が入っていたのでしょうか。1日でなんと74、700人亡くなられたと聞いております。

その日に亡くなられた人だけではなく、原子爆弾が原因で病気になるいその後亡くなられた人や今もなお病気に苦しんでいる方々もおられます。原爆の日に傷にも負けずに帰って来た人が、4日か5日して急に亡くなられた。恐ろしいですね。私も40日を過ぎた頃、

体中吹出物がしました。

ちょうどその時、永井隆先生のお子さん2人とおばあちゃんが、私の家の横を通って看護婦さんを連れて見えられ、永井先生自身も体全体に傷を負い、杖にすがりながらもみんなを見て治療をしてくださっておられました。その看護婦さんの話で今の「フランシスコ病院」そこが原子爆弾が落ちるまでは「神学校」と言って、「カトリック」の人が神父様になる学校でした。そこが急に病院にかわり、アメリカからの先生や看護婦さんもおられ、薬も良いのがありますよ」と教えてくださいました。もちろん、日本人の先生や看護婦さんもおられます。

急に病院になったと言いましても、雨が降る時など雨漏りがするし、ガラスが割れてしまっていて板などで打ち付けてはありますが、風が吹き込んできます。昭和町の二郷橋から病院まで

の道路の横には、牛や馬の死骸、そして人間の頭の骨など多くあり、その辺を通り抜けるのも大変でした。病院に着くと患者が多くて、待つ時間も大変でしたが、又その辺りの臭いが大変でした。病院では日本人の先生や看護婦さんもうらっしゃいましたが、アメリカの人が多かったです。今でも覚えているのは、とても太った真っ白い肌のシスターがいつもニコニコして手招きしてくださったり、待合室にいると迎えに来てくださって、とても感じの良いお方でした。

その後、風邪でも引くと、今度は原爆症ではないか、原爆が原因での病気がいつ出て、いつ死ぬのかと思うようになりしました。私たちの頃は、誰でも原爆症を心配して結婚しない人、それに結婚した人でも子どもが産めない人、いろいろ居ます。同級生の中にでも、子どももない身寄りもないので、今は

まだ食事も作れるので、食事でも作れなくなると「原爆ホーム」にお世話になると話しております。

世の中には、戦争のためにいろいろ苦しんでおられる方がいらっしゃいますね。それを思う時、やはり戦争のない平和が良いです。そして日本の国だけでなく、世界中の人々が平和に過ごすことができますようにと願っています。いつまでもいつまでも戦争のない平和な世の中であって欲しいですね。今日は私の話を一生懸命聞いてくださいます、本当にありがとうございます。